

---

# 新保南遺跡

中山間地域総合整備事業に伴う

発掘調査報告書

---

2003年2月

水見市教育委員会



卷首図版1 新保南遺跡遠景



卷首図版2 調査区全景



1. SD03出土須惠器



2. 瓦凸面



3. 瓦凹面

卷首图版3



1. 貿易陶磁



2. 耳付壺

卷首圖版4

---

# 新保南遺跡

中山間地域総合整備事業に伴う  
発掘調査報告書

---

2003年2月

氷見市教育委員会

# 序

東に富山湾を隔てた靈峰立山を仰ぐ氷見市は、古くより海の幸、山の幸に恵まれ、人々の生活の場として、数多くの文化遺産を生み育んできました。

新保南遺跡は、中山間地域総合整備事業による圃場整備に先立って、平成10年に実施した分布調査で確認された遺跡です。平成13年には試掘調査を実施し、遺跡の保護のための協議を重ねました。その結果、工事関係者や地元の方々のご理解を得ることができ、圃場整備の工法を変更することで、遺跡の大部分を保存することが可能となりました。しかしながら遺跡の一部は保存が困難となつたため、今回発掘調査を実施いたしました。

新保南遺跡の所在する上庄川流域は、氷見市の中でも、古墳群や横穴墓群、古代寺院、中世寺院、城跡など多くの遺跡が密集する地域です。今回の調査は、この地域の歴史を知る貴重な資料を提供してくれました。

この報告書が今後の文化財保護の一助となるとともに、地域の歴史への関心、理解につながることを願っております。

調査や、保存のための協議にあたりましては、富山県や新保地区などの関係者の皆様に多大なるご協力をいただきました。この場を借りまして、厚くお礼申し上げます。

平成15年2月

氷見市教育委員会

教育長 中 尾 俊 雄

## 例　　言

- 1 本書は、富山県氷見市新保地内に所在する新保南遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、中山間地域総合整備事業による圃場整備工事に先立ち、富山県農地林務部高岡農地林務事務所の委託を受けて、氷見市教育委員会が実施した。
- 3 調査面積は、約463m<sup>2</sup>である。
- 4 調査期間は、平成14年5月7日より6月25日（実働28日間）である。
- 5 調査は、県からの委託金で実施し、そのうち地元負担分については、国庫補助金・県費補助金の交付を受けて市が負担した。
- 6 調査事務局は、氷見市教育委員会生涯学習課に置き、副主幹坂本研資・主任学芸員大野究・学芸員廣瀬直樹が調査事務を担当し、課長池田晃が統括した。
- 7 調査は、大野・廣瀬が担当した。
- 8 本書の執筆・編集は大野の協力を得て廣瀬が担当した。また遺物の実測、トレースは調査担当が中心となり、後述する整理作業員が行った。
- 9 出土遺物と調査に関わる資料は、氷見市教育委員会生涯学習課が保管している。
- 10 調査参加者は次のとおりである。

発掘作業：安土健三・穴倉務・柿本せつ子・境信男・嶋口邦子・曾場栄一・百々木キミ子・前田貞子・丸山レイ子・宮崎清・谷内愛子・谷内健一・山下金次郎・山本玲子（以上、氷見市シルバー人材センター）

整理作業：三矢恵京・日南静

- 11 調査・本書作成にあたり、下記の方々・機関から多大なご教示・ご協力を得た。  
記して感謝申し上げる。

新保地区・富山県高岡農地林務事務所・富山県埋蔵文化財センター・氷見市ふるさと整備課・池野正男・西井龍儀・宮田進一・細田隆博（富山大学人文学部考古学研究室学生）

## 目 次

第1章：調査に至る経緯と経過 .....	1
第2章：遺跡の環境 .....	2
第1節：遺跡の地理的環境 .....	2
第2節：遺跡の歴史的環境 .....	2
第3章：調査の成果 .....	4
第1節：調査の概要 .....	4
第2節：基本層序 .....	4
第3節：遺構 .....	4
(1) 下層遺構 .....	4
(2) 上層遺構 .....	5
第4節：遺物 .....	8
(1) 下層遺構出土遺物 .....	8
(2) 上層遺構出土遺物 .....	8
(3) 遺構外出土遺物 .....	14
(4) SX01出土の瓦について .....	18
第4章：まとめ .....	21
参考文献 .....	23
報告書抄録 .....	

## 表 目 次

表1 下層検出ピット計測表 .....	7
表2 上層検出ピット計測表 .....	7

## 図 目 次

第1図	周辺の遺跡	3
第2図	基本層序模式図	4
第3図	S X 01 出土瓦実測図	19
第4図	小窓瓦窯平瓦叩き目分類図	19
第5図	遺跡の範囲と調査区	25
第6図	遺構全体図	27
第7図	遺構実測図(1)	29
第8図	遺構実測図(2)	31
第9図	遺構実測図(3)	31
第10図	遺構実測図(4)	32
第11図	遺構実測図(5)	33
第12図	遺構実測図(6)	34
第13図	遺構実測図(7)	34
第14図	遺構実測図(8)	35
第15図	遺物実測図(1)	37
第16図	遺物実測図(2)	38
第17図	遺物実測図(3)	39
第18図	遺物実測図(4)	40
第19図	遺物実測図(5)	41
第20図	遺物実測図(6)	42
第21図	遺物実測図(7)	43
第22図	遺物実測図(8)	44
第23図	遺物実測図(9)	45
第24図	遺物実測図(10)	46

# 図版目次

- |                        |                      |
|------------------------|----------------------|
| 卷首図版 1 新保南遺跡遠景         | 図版10 1. SX01検出状況     |
| 卷首図版 2 調査区全景           | 2. SX01遺物出土状況        |
| 卷首図版 3 1. SD03出土須恵器    | 3. SX01西側土層断面        |
| 2. 瓦凸面                 | 4. SX01南側土層断面        |
| 3. 瓦凹面                 | 5. SX01第4層自然遺物堆積状況   |
| 卷首図版 4 1. 貿易陶磁         | 6. SX01自然遺物（葉）       |
| 2. 耳付壺                 | 7. SX01完掘状況          |
| 図版 1 遺跡周辺空中写真(1947年撮影) | 8. SX01断ち割り          |
| 図版 2 1. 新保南遺跡遠景        | 図版11 1. SD01土層断面     |
| 2. 調査区近景               | 2. SD01完掘状況          |
| 図版 3 調査区全景             | 3. SD02土層断面          |
| 図版 4 1. 調査前遺跡近景        | 4. SD04完掘状況          |
| 2. 調査区基本土層             | 図版12 1. SD01検出状況     |
| 図版 5 1. 調査区南側完掘状況      | 2. SD01・02完掘状況       |
| 2. 調査区南側完掘状況           | 3. SD01遺物出土状況        |
| 図版 6 1. 柱穴列とSD03       | 4. SD01遺物出土状況        |
| 2. 柱穴列とSD03            | 5. SD02遺物出土状況        |
| 3. 柱穴列                 | 図版13 1. 上層遺構ピット群検出状況 |
| 4. SP37土層断面            | 2. 上層遺構完掘状況          |
| 5. SP37完掘状況            | 3. 土器だまり             |
| 6. SP38土層断面            | 4. 土器だまり遺物出土状況       |
| 7. SP38完掘状況            | 5. 包含層II遺物出土状況       |
| 図版 7 1. SD03検出状況       | 6. 包含層II遺物出土状況       |
| 2. SD03完掘状況            | 7. 作業風景              |
| 3. SD04検出状況            | 8. 作業風景              |
| 4. SD04完掘状況            | 図版14 遺物写真(1)         |
| 図版 8 1. SD03とSD04      | 図版15 遺物写真(2)         |
| 2. SD03とSD04           | 図版16 遺物写真(3)         |
| 3. SD03上層断面A-A'        | 図版17 遺物写真(4)         |
| 4. SD03土層断面B-B'        | 図版18 遺物写真(5)         |
| 5. SD03遺物出土状況          | 図版19 遺物写真(6)         |
| 6. SD03遺物出土状況          | 図版20 遺物写真(7)         |
| 7. SD04土層断面C-C'        | 図版21 遺物写真(8)         |
| 8. SD04・SD46上層断面D-D'   | 図版22 遺物写真(9)         |
| 図版 9 1. SK01           | 図版23 遺物写真(10)        |
| 2. SK02                | 図版24 遺物写真(11)        |
| 3. SD05                | 図版25 遺物写真(12)        |
| 4. 下層遺構ピット群            | 図版26 遺物写真(13)        |
| 5. SP39遺物出土状況          | 図版27 遺物写真(14)        |
| 6. 下層遺構完掘状況            | 図版28 遺物写真(15)        |

## 第1章 調査に至る経緯と経過

平成10年10月、水見市農地林務課から新保地内において中山間地域総合整備事業による圃場整備の計画があることが知られ、計画地内における埋蔵文化財の有無について照会があった。

事業計画予定地内には、埋蔵文化財包蔵地は確認されていなかったが、周囲の丘陵に古墳や横穴が、数多く分布していることから、水見市教育委員会では事業地内における埋蔵文化財の状況を把握するため、平成10年11月に分布調査を実施した。

分布調査の結果、事業予定地のかなり広い範囲で遺物が表面採集されたため、この範囲を新保南遺跡として周知し、包蔵地のより詳しい状況を把握するための試掘調査を実施した。試掘調査は平成13年3月に実施し、その結果、対象地西南側を中心に造構のある黄褐色砂質土層を確認した。

平成13年度に入り、富山県高岡農地林務事務所と地元を交えての遺跡の保護を前提とした協議を開始した。協議の中で、圃場整備の工法として、盛土による工法に変更することで遺跡の保存を図るということで合意した。しかし設計が仕上がった段階で、遺跡範囲の一部については削平が避けられないことになり、そのため、その箇所約463m<sup>2</sup>について平成14年度に本発掘調査を実施することになった。

調査は、5月1日、2日両日に業者による基本杭の設定を実施した後、5月7日より6月25日までの実働28日間で実施した。5月7日より6月19日までの26日間で、発掘作業員による表土及び包含層の掘削・遺構検出・造構発掘を行い、適時、調査担当者が写真撮影、遺構実測を行った。6月21日、発掘機材の撤収及び調査区の清掃を行い、その後ラジコンヘリによる空中写真の撮影を実施した。また同日、地元の明和小学校児童の校外学習として、遺跡の見学会を行った。6月25日、重機によりSX01の断ち割りを行い、SX01が掘鉢状の断面をもつ土坑であることを確認して、新保南遺跡の本調査を終了した。

本調査終了後の8月27日、遺跡の北西端で工事の立会いを実施した。該当箇所は、過去の圃場整備によると考えられる盛土層が厚く堆積しており、工事に支障はない判断した。

## 第2章 遺跡の環境

### 第1節 遺跡の地理的環境

水見市は、富山県の西北部に位置し、能登半島の基部東側にあたる。昭和27年の市制施行から昭和29年までに、太山村を除く水見郡1町17村が合併し、現在の水見市が成立した。面積は約230km<sup>2</sup>、人口は約5万8千人である。

市域は、北・西・南の三方が標高300~500mの丘陵に取り囲まれ、東西約20kmの海岸線をもって富山湾に面している。

遺跡の所在する新保地区は、水見市のはば中央を流れる上庄川中流に位置する。上庄川は、水見市南西端の大釜山(501.7m)に発し、約22kmで富山湾に注ぐ河川であり、水見市では長さ・流域面積が最大のものである。

水源からはば北上して流れる上庄川は、ちょうど新保地区のあたりで東に屈折しており、またここは南下してきた論田川との合流地点に近い。論田川はその上流に、地滑り地帯である論田・熊無地区を抱えており、これまでに多量の土砂を排出したとみられ、新保・谷屋・中村地区の上庄川が、谷の南側を流れるのは、論田川からの土砂に押しやられたからではないかと考えられている。

新保南遺跡は、この上庄川の屈折地点右岸の谷に立地し、標高は約13mである。この谷は東西約500m、南北約300m、北が上庄川、他の三方が丘陵に取り囲まれ、その南には「堂の池」と呼ばれるため池がある。

### 第2節 遺跡の歴史的環境

以下では上庄川中流域の遺跡を大まかに示しながら、歴史的環境を述べたい。

本遺跡周辺の地域では、これまで弥生時代以前の遺跡は確認されていなかった。今回の新保南遺跡の調査で弥生土器と考えられる土器片が出土しており、近隣に未発見の弥生時代の遺跡が存在する可能性がある。

古墳時代のこの地域は、水見市内で最も古墳が集中する地域であり、本遺跡の南側の丘陵に速川神社古墳群、東側の丘陵にイヨダノヤマ古墳群が立地し、西側の丘陵には、本遺跡に向う形で新保横穴群が所在する。上庄川をはさんだ北側の丘陵には、中村天場山古墳・中村栗原古墳群・谷屋浦出古墳群・新保古墳群・中村横穴群などが立地する。このうち直径約20mの円墳であるイヨダノヤマ3号墳は、平成5年に発掘調査が実施され、埋葬施設から県内3例目となる短甲のほか、鉄刀・鉄鎌などが出土し、古墳時代中期の武人的性格の被葬者が推定されている。また、谷屋B遺跡では、子持勾玉が採集されている。

古代には、上庄川をはさんで本遺跡の西約500mに小庵庵寺が所在し、これまでに半瓦や須恵器が採集されており、8世紀初め頃の寺院と推定されている。また現在小久米神社境内にある「いぼ石」は、小庵庵寺から出土した同庵寺の塔心礎石とされ、さらには意字の南方約250mには、その瓦の一部を焼いた小庵瓦窯が立地している。

中世には、新保城跡・新保西城跡が築かれており、速川神社南側の一帯は浅尾山とよばれ、宗教関連遺跡の立地が推定されている。新保南遺跡の立地する通称伊尾田という水田地帯では昭和初年の耕地整理で懸仮・石造物などが出土したという。



- 1 新保南遺跡（古代・中世）  
 2 新保横穴群（古墳）  
 3 速川神社古墳群（古墳）  
 4 イヨダノヤマ古墳群（古墳）  
 5 滝尾山遺跡（中世）  
 6 早借サカダ遺跡（中世か）  
 7 小座庵寺（古代）  
 8 小窪瓦窯跡（古代）  
 9 小窪城跡（中世）  
 10 田江北古墳群（古墳）  
 11 田江大畠遺跡（繩文）  
 12 田江古墳群（古墳）  
 13 小久米B古墳群  
 14 日詰コブクロ遺跡（古代）  
 15 早借ワタ古墳群（古墳）  
 16 久目トリノマエ遺跡（古代・中世）  
 17 久目安楽寺遺跡（古代）  
 18 久目桑の木遺跡（古代）  
 19 飛瀧城跡（中世）  
 20 谷屋新堂出古墳（古墳）  
 21 谷屋A遺跡（古代・中世）  
 22 新保城跡（中世）  
 23 新保古墳群（古墳）  
 24 新保西城跡（中世）  
 25 谷屋浦出古墳群（古墳）  
 26 谷屋B遺跡（古墳）  
 27 谷屋C遺跡（古代）  
 28 中村天場山古墳（古墳）  
 29 中村梨屋古墳群（古墳）  
 30 中村城跡（中世）  
 31 中村横穴群（古墳）  
 32 柿谷大口遺跡（中世）  
 33 柿谷上谷山古墳群（古墳）  
 34 泉横山遺跡（古代）  
 35 泉古墳群（古墳）  
 36 泉往易古墳群（古墳）  
 37 泉谷内口古墳群（古墳）  
 38 泉A遺跡（古代）  
 39 泉C遺跡（古代）  
 40 中尾喜城古墳群（古墳）  
 41 泉B遺跡（古代・中世）  
 42 上田古墳群（古墳）  
 43 千九里城跡（中世）  
 44 上田A遺跡（古代）  
 45 上田B遺跡（中世）  
 46 竹里岩屋堂遺跡（中世）  
 47 中尾茅戸古墳群（古墳）  
 48 上田西古墳（古墳）  
 49 上田C遺跡（古代）  
 50 上田D遺跡（古墳）  
 51 上田南俄遺跡（繩文・古代）  
 52 上田F遺跡（古代）  
 53 上田E遺跡（古代）  
 54 高松城跡（中世）

第1図 周辺の遺跡 (S=1/25,000)

## 第3章 調査の成果

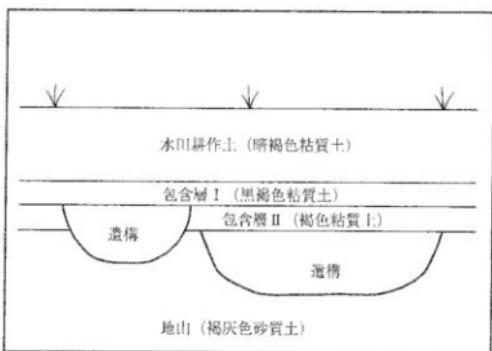
### 第1節 調査の概要

調査区に、国上座標を用いて5m間隔に基準杭を設定し調査を行った。造構面までの深さが20~30cmと浅いため、表土の掘削以降の作業は全て人力で実施した。調査区の北東側は試掘で確認した遺跡範囲の外周部に当たるため、グリッドにあわせて拡張し造構の有無を確認した。

### 第2節 基本層序（第3図、図版4）

遺跡の範囲は過去の圃場整備による影響が比較的少ない箇所と考えられるが、それでも場所により若干の削平を受けている。また調査区を横切るように暗渠が設置されており、擾乱を受けている箇所がある。

遺跡の基本層序は、現水田耕作土（暗褐色粘質土）、遺物包含層I（黒褐色粘質土）、遺物包含層II（褐色粘質土）、地山（褐灰色砂質土）に大別される。造構は、包含層IIを掘り込むものと地山を掘り込むものの2層を検出した。



第2図 基本層序模式図

### 第3節 遺構（第6図）

上層・下層の2造構面で、柱穴列・溝・流路・土坑・ピット等を検出した。主な造構については以下に記述し、ピットについては別表を設けた（表1・2）。

#### (1) 下層造構

##### 溝・流路（第7・10図、図版7・8・9）

SD03 調査区南側で検出した東西方向の流路である。検出長2200.0cm、最大幅240.0cm、深さ68.0cmを測る。上層のSD01・02と平行する。東から西へ流れ、おそらく上庄川に流れ込んでいたものと考えられる。SD03の上層は、ある程度まで自然堆積した様子がうかがわれ、掘り直したような痕跡はない。遺物は須恵器、土器類、貿易陶磁、珠洲焼、石製品などが出土しているが、7世紀後半から13世紀前半までと非常に年代幅が広い。また7世紀末頃の須恵器杯Bの蓋と身のセットが、同位置で重なった状態で出土している。遺物の年代から廃絶は13世紀前半頃だと考えられる。

SD04 SD03に流れ込む東西方向の溝である。検出長1256.0cm、最大幅80.0cm、深さ9.0cmを測る。

**SD05** SD03の南側に位置する南北方向の溝である。検出長183.0cm、最大幅52.0cm、深さ11.0cmを測る。埋土上に炭化物が多く混入している。弥生土器ないし古墳時代土師器と考えられる土器片が20点出土している。

#### 柱穴列（第8図、図版6）

調査区南東、SD03の南側で検出した。総長662.0cm、柱間205.0cmを測る。SD03に平行する。SP33・35・37・38により構成され、そのうちSP35・37・38では柱痕を確認した。柱痕の径は14~19cmを測る。SD03に沿う横列、あるいは調査区南側に延びる掘立柱建物であろう。SP37から時期不明の土器片が出土している。柱穴列の時期は、SD03と同時期とすれば下限は13世紀前半頃となる。

#### 土坑（第10・12図、図版9・10）

**SK01** SD03の南側で検出した方形の土坑である。長径140.0cm、短径97.0cm、深さ10.0cmを測る。須恵器が1点出土している。

**SK02** SK01の西側で検出した楕円形の土坑である。長径105.0cm、短径39.0cm、深さ10.0cmを測る。土器類が4点出土している。

**SK01** 調査区北側で検出した大型の土坑である。長径334.0cm、短径296.0cm、深さ109.0cmを測り、平面形はいびつな円形を呈する。暗渠が横切っており、攪乱を受けている箇所がある。埋土はレンズ状に堆積している。第1層は埋土中に10cm前後の礫が混入する。第3層は全体に薄く堆積しているが、一部が酸化し、橙色を呈している。第4層では木の枝や葉が堆積している。埋土が自然堆積する際に積もった葉とも考えられるが、枯葉ではなく緑色をした葉であるため、何らかの理由で人为的に敷き詰められた可能性がある。遺物は1・2・4層にまばらに混入しているが、12世紀代を中心として7世紀後半から13世紀前半のものが出土しており、時期幅が大きい。

遺構を横切る暗渠の陶管からの出水と地下からの湧水のため、第6層まで掘削した後、重機による断ち割りを行い、断面がいびつな鉤鉋状を呈する土坑であることを確認した。遺構の性格は不明である。

その他にピットを20基検出した（表1、第9・11図、図版9）。

#### (2) 上層遺構

##### 溝（第14図、図版11・12）

**SD01・02** 調査区中央やや南側で検出した東西方向の溝である。攪乱により中央付近が途切れているため、便宜上東側をSD01、西側をSD02としたが、一連の溝であろう。SD01・02をあわせた総検出長は2176.0cm、最大幅84.0cm、深さ30.0cmを測る。埋土はやや粘質の暗褐色土の単層である。下層のSD03に平行する。遺物は須恵器、土器類、白磁、土製品、焼けた粘土塊などが出土している。遺物の時期は7世紀後半、10世紀後半、12世紀代の3時期のものが見られる。下層のSD03とはさほど時期差はないと考えられる。

##### 土器だまり（第13図、図版13）

包含層Ⅱで土器の集中を確認した。明確なプランは検出できなかったが、長さ約2m、幅約30cmの範囲に土器片が集中しており、比較的の形態をとどめるものもあった。出土した遺物は弥生土器ないし土師器が86点である。細片のため復元しきれなかったが、同一個体と判断できる破片が多く、少なくとも

図示した4個体分の破片であると考えられる(第20図)。

その他、ピットを25基検出した(表2、第10・11図、図版13)。これらは過去の圃場整備及び耕作時に削平を受けていると考えられ、浅いものが多い。また、明確に建物や柱穴列を構成するようなものはないが、SP13・14・15には柱痕が残る(柱痕径10~11cm)。

表1 下層検出ピット計測表

No.	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	出土遺物	備考
SP22	19.5	17.0	5.5		
SP23	19.5	17.0	4.0		
SP24	20.5	16.0	2.5	須恵器 1	
SP31	22.0	22.0	27.0		SP31>SP32
SP32	(79.0)	35.0	9.5		SP31>SP32
SP33	30.0	26.5	28.0		柱穴列
SP34	39.5	35.0	25.0	土師器 5	
SP35	80.0	46.0	47.5		柱穴列。柱痕径14.0cm
SP36	27.0	24.0	41.0		
SP37	57.0	40.0	37.5	土師器 1	柱穴列。柱痕径16.0cm
SP38	46.0	43.5	36.5		柱穴列。柱痕径19.0cm
SP39	31.0	24.0	13.0	土師器 1	
SP40	41.0	34.5	5.0	土師器 2	
SP41	20.0	17.0	7.5		
SP42	52.0	38.0	5.5	土師器 1	
SP43	25.0	25.0	6.0		
SP44	24.0	22.5	9.5		
SP45	18.0	18.0	13.5		
SP46	22.0	19.0	5.5		SP46>SD04
SP47	46.0	36.0	24.0		
SP48	50.0	34.0	20.0		
SP49	53.5	37.0	17.5		
SP50	32.0	39.0	14.5		
SP51	65.0	45.5	9.5		

表2 上層検出ピット計測表

No.	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	出土遺物	備考
SP01	63.5	42.0	28.5	須恵器 1、土師器 1	
SP02	46.5	39.0	6.5		
SP03	23.5	22.0	7.0		
SP04	22.5	19.0	10.0		
SP05	23.0	22.0	19.0	土師器 1	
SP06	19.0	19.0	8.0	土師器 1	
SP07	14.5	13.0	5.0		
SP08	23.0	19.0	6.5		
SP09	25.0	25.0	8.0		
SP10	22.0	20.0	9.5		
SP11	28.5	21.5	6.5		
SP12	22.5	21.5	6.0		
SP13	25.5	20.0	7.5		柱痕径11.0cm
SP14	28.0	20.0	19.0		柱痕径10.0cm
SP15	23.0	15.5	15.5		柱痕径11.0cm
SP16	21.0	21.0	5.0		
SP17	20.0	19.5	12.0		
SP18	17.5	17.0	12.5		
SP19	20.0	19.5	6.5		
SP20	34.0	20.0	8.0		
SP25	43.5	42.5	11.5		
SP26	32.0	27.0	5.5	土師器 1	
SP27	24.0	18.0	2.5		
SP28	32.0	25.0	3.5		
SP29	20.0	18.5	5.5		

※SP21・30は欠番

※( )は残存値

※遺構の切り合いは「新&gt;古」で表した

#### 第4節 遺物

調査では2212点の遺物が出土した。その内訳は、須恵器346点、土器類1681点、珠洲焼35点、貿易陶磁60点、その他の遺物90点である。

特に土器類が多く出土しているが、細片や摩滅したものが多い。土器類はおおむね10世紀代から13世紀代（古代後期から中世前期）のものが中心となるが、一部弥生時代から古墳時代にかけてのものがあり、出土した須恵器の年代から考えて7世紀末ころのものも含まれている可能性がある。だが、器形をうかがえるものが少ないと、ほとんどが摩滅により調整が不明であることから時期を明確に判断できるものは少ない。そのため今回土器類は出土地点ごとに一括して紹介することとした。

また、白磁を中心として60点の貿易陶磁が出土した。貿易陶磁に関しては細片を含めてすべて図化した。

##### (1) 下層遺構出土遺物

SD03出土遺物（第15～17図、図版14・15・17～19）

SD03では437点の遺物が出土した。そのうち96点を図示した。

###### 須恵器（1～48）

1と2は須恵器杯Bの蓋と身のセット。1は口径17.1cm、器高3.3cmを測る。外面は上部に広く回転ヘラケズリを施す。つまみは径3.4cm、中央をくぼめ、先端を非常に薄く作る繊細なつくりである。口縁端部は断面を三角形に成形する。還元硬質で堅緻に焼き締まり、胎土は緻密で0.2～1mm程度の微砂粒と黒色粒を含む。2は口径15.8cm、器高4.9cm、高台径11.0cmを測る。底外面に回転ヘラ切り痕を残し、体部下部は回転ヘラケズリを施す。強くふんばり外側に八の字に開くしっかりした高台をもつ。全体に焼成は還元硬質で良好だが、高台端部から底部内面にかけて軟質の焼き上がりとなる。胎土は緻密で0.2～1mmの砂粒と黒色粒を含む。1、2いずれも焼成、胎土ともに似通っており、おそらく当初よりセットであることを意図した上で製作、焼成されたものと考えられる。年代は7世紀末頃に比定できる。また、蓋と身それぞれの破片が同じ場所から団まって出土しており、セットとして使用されていたものが共に埋没したと考えられるが、遺構の埋没時期は12世紀末頃と推測され、埋没の経緯については不明である。

3～13は杯蓋である。3はやや中心が盛り上がるボタン状のつまみである。径は2.3cmを測る。焼成は良好で、胎土に2mm前後の砂粒と黒色粒を含む。4はかえりをもつもので、口径14.8cmを測る。7世紀後半のものだろう。焼成はやや軟質で灰白色を呈する。5は口径23.4cmの大型のもの。端部は三角形に成形する。焼成は良好で、胎土に1mm前後の砂粒を含む。その他のものは口径10.8～17.5cmを測る。10は外面に自然釉がかかる。端部は6・7・10・11が外反、8・12は三角形、9はつまんだだけのものである。いずれも焼成は良好で、胎土に1～3mmの砂粒を含む。

14～15は杯B身である。14は横に大きく張り出し、底面に広く面をとった丁寧なつくりの高台が付く。高台径は9.0cmを測る。底内面に不定方向のナデ、底外面に回転ヘラ切り痕が残る。焼成は良好で、胎土に1～5mmの砂粒を含む。15はやや大型の製品で高台径は12.0cmを測る。底外面に回転ヘラケズリ痕が残る。焼成は良好で胎土に黒色粒、海綿骨針を含む。

16～26は杯Aである。16は口径11.8cm、器高3.5cm、底径8.0cmを測る。焼成は良好で灰白色を呈する。底外面は回転ヘラ切り痕をナデ消している。17は口径11.4cm、器高4.2cm、底径7.4cmを測る。口縁部が外反しながら立ち上がるが、端部内面に軽く面を取り、その面に沈線が一条巡る。底部はやや丸みをも

つ。焼成は堅緻で胎土に0.5mm程度の砂粒を少量含む。18は口径12.2cm、器高3.6cm、底径8.8cmを測る。やや焼きが甘く、胎土には1~4mm程度の砂粒を多く含む。底外面に回転ヘラ切り痕を残す。19は口径11.2cmを測る。やや軟質の焼き上がりで灰白色を呈する。21は底部が丸底状となり杯口の可能性がある。焼成は不良で灰白色を呈する。23は底径11.6cmのやや大型のもの。焼きはやや甘い。底内面に不定方向のナデが確認できる。25は底径6.0cmの小ぶりでやや厚めの底部をもち、いわゆる杯Gの可能性がある。その他のものは底径8.0~8.2cmを測る。22・25・26は焼成良好、20・24は軟質の焼き上がりで灰黄色を呈する。

27~31は杯類の口縁部である。口径は12.8~15.6cmを測る。いずれも焼成は良好で、胎土に砂粒を含む。28は外面にロクロ目を顕著に残す。30は口縁端部がやや外反する。

32・33は鉢類か。どちらも口縁端部内面に水平に面取りをする。32は口径15.8cmを測り、内外面に自然袖がかかる。焼成は良好である。

34は瓶類の高台。接合部で剥落したものである。高台径は10.0cmを測る。焼成は良好で、胎土に0.5mm前後の砂粒を含む。35は双耳もしくは四耳の瓶類耳基部。内面上部に斜め方向のナデ、内下面下部に同心円状当て具痕を残す。焼成は良好で、胎土に3mm程度の砂粒を含む。8世紀を下らない時期のものか。36・37は壺瓶類の体部破片。36は外面ともロクロナデ、37は外面に平行叩き目とロクロナデ、内面にロクロナデが残る。どちらも焼成は良好で1~2mmの砂粒を含む。37は横縫の可能性がある。

38~48は壺である。38は壺の口縁部。口径23.4cmを測る。外面は、口縁端部付近まで平行叩きを施した後、その上からロクロナデでナデ消した痕跡が認められる。焼成は不良で灰白色を呈する。胎土に1mm程度の砂粒、赤色粒を含む。39は壺肩部。外面は平行叩き目をロクロナデでナデ消し、内面は同心円状当て具痕をロクロナデでナデ消す。焼成は不良で灰白色を呈する。胎土に1mm前後の砂粒を含む。42・45とは同一個体の可能性がある。40~48は体部破片である。42・44・45・47・48は壺元軟質の焼き上がりで、特に44は摩滅が著しく、内面の当て具痕が確認できない。また44は外面に煤が付着している。40・42・45~48は外面に平行叩き目、内面に同心円状当て具痕が残る。41は、外面は平行叩きの上からカキメを施し、内面は同心円状当て具痕が残る。43は、外面は平行叩き目、内面は同心円状当て具の縫部を用いており、平行線状を呈する。

#### 土器類(49~62)

49~51はいずれも弥生土器ないしは古墳時代土師器と考えられる。49は壺口縁部か。外反する口縁部だが、摩滅が著しく詳細は不明である。50は壺の底部である。底径7.0cmを測る。胎土に2mm程度の砂粒と赤色粒を多く含む。焼成は良好で淡黄色を呈する。摩滅のため調整は不明である。51は台付鉢などの脚か。台径5.9cmを測る。胎土に海綿骨針、0.5mm程度の砂粒を含む。焼成は良好で浅黄橙色を呈する。

52は柱状高台をもつロクロ成形の土師器皿である。高台径6.0cmを測る。底外面に回転糸切り痕が残る。焼成は良好で浅黄色を呈する。胎土には混入物がほとんどない。12世紀前半頃のものと考えられる。

53は非ロクロ成形の土師器碗である。口径14.2cm、器高4.3cm、底径7.4cmを測る。口縁部に2段にヨコナデを施し、体部外面下半には指頭圧痕を明瞭に残す。底内面には不定方向のナデを施す。焼成は良好で、ぶい黄橙色を呈する。胎土は緻密で、1mm程度の砂粒と赤色粒をわずかに含む。12世紀後半から13世紀前半にかけてのものと考えられる。

54は口径12.8cm、器高2.5cm、底径7.6cmを測る。表面の剥落が激しく調整は不明だが、おそらくロクロ

成形であろう。焼成は良好で橙色を呈する。胎土は緻密で混入物を含まない。13世紀初め頃のものと考えられる。

55・56は非ロクロ成形の土師器皿。55は口径8.8cm、器高1.5cmを測る。胎土は緻密で海綿骨針を含み、浅黄橙色を呈する。56は口径7.1cm、器高1.1cmを測る。焼成は良好で橙色を呈する。胎土に0.2mm程度の砂粒をわずかに含む。摩滅が著しい。いずれも12世紀末～13世紀前半頃のもの。

57～62は土師器皿の底部。57はロクロ成形で底外面に回転糸切り痕を残す。底径は5.8cmを測る。体部下半でくびれ、柱状高台を意識していると考えられる。胎土に海綿骨針を含む。焼成はやや甘く、灰白色を呈する。11世紀後半のものか。58～62は底径4.0～8.4cmを測る。いずれも摩滅のため調整は不明である。

#### 珠洲焼(63～67)

63は双耳壺。口径11.2cmを測る。口縁部は外反しながら立ち上がり、端部外面に垂直に面を取る。焼成は良好で灰色を呈し、外面には自然釉がかかり暗灰色を呈する。胎土は緻密だが0.2～1mmの砂粒と海綿骨針を含み、器壁の表面には内外面とも黒色の鉄分の粒が多く吹き出している。内外面ともロクロ成形で、外面肩部に7条を1単位とした波状文を施す。波状文の上に、波状文をガイドとするようにして耳を取り付けるが、基部を残して欠損している。残存する基部と対称となる位置に反対側の耳の基部が残るため、双耳壺と判断できる。珠洲焼の編年でⅠ期のものと考えられる。

64はロクロ成形の中型壺底部。底径10.6cmを測る。底外面は砂底で、木目状の圧痕が残る。体部下部に粘土が貼り付き肥厚している。焼成は良好で胎土に1mm大の砂粒と海綿骨針を含む。65は擂鉢。卸目は認められない。焼成は良好だが内外面とも摩滅している。胎土に1mm前後の砂粒と海綿骨針を含む。いずれも珠洲焼の編年でⅠ期のものであろう。66・67は壺ないし壺の体部破片。外面に平行叩き目を残す。66は焼成が不良で灰白色を呈し、著しく摩滅している。67は堅緻な焼き上がりで外面は自然釉がかかり暗赤褐色を呈し、内面は褐灰色を呈する。

#### 貿易陶磁(68～92)

68～92は白磁である。68～70・75は碗。68は大型の玉縁状口縁をもつもの。口径は16.8cmを測る。69は口縁部が外側に折れ、喇叭状となるもの。口径は16.6cmを測り、外面下半は露胎となる。70は小型の玉縁状口縁をもつもの。口径は14.6cmを測る。71～74・76～81は皿。71～73はいずれも口縁が内湾するもの。口径は71が10.8cm、72が10.8cm、73が9.8cmを測る。82～91は椀皿類の体部破片。いずれも12世紀代におさまるものと考えられる。

92は青白磁の小壺。外面に選挙文を施し、淡青白色の釉が厚くかかる。おそらくS X 0 1出土のもの(154)と同一個体であろう。12世紀代のものと考えられる。

#### 石製品(93・94)

93は浮き石か。最大長8.4cm、最大幅4.0cm、最大厚2.7cmを測る。長卵形の自然石のほぼ中央に横方向に溝を彫る。石材は微粒砂岩で軽く、石錐ではなく浮きとして用いられたと推測される。94は砥石か。残存長4.4cm、残存幅2.6cm、残存厚1.3cmを測る。欠損するが二面に平滑な面が残る。使用痕は認められない。

その他、鉄滓が1点、焼けた粘土塊が5点出土している。また、厚さ3cm程度の板状の粘土塊が1点

出土しているが、これは砂っぽい胎土で被熱しており、が壁の可能性がある。

#### SD05出土遺物（第17図、図版19）

土器片が20点出土した。95は弥生土器ないし古墳時代土師器の壺甌類の底部である。内外面とも摩滅が著しく、調整は不明である。胎土に0.3mm程度の微砂粒と海綿骨針を含む。

#### SK01出土遺物（第17図、図版19）

須恵器が1点出土した。96は瓶類の体部破片である。内外面ともカキメを施す。焼成は良好である。

#### SK02出土遺物（第17図、図版19）

土器片が4点出土した。97は弥生土器ないし古墳時代土師器の壺甌類の底部である。内外面とも摩滅が著しく、調整は不明である。胎土に1~2mm程度の砂粒を含む。

#### SP24出土遺物（第17図、図版19）

須恵器が1点出土した。99は須恵器杯類の口縁部破片である。内外面ともロクロナデを施す。陶質に焼き縮まるが、酸化しており浅黄橙色を呈する。

#### SX01出土遺物（第18・19図、図版15・16・19~21）

SX01では332点の遺物が出土した。そのうち59点を図示した。

##### 須恵器（100~109）

100~102は杯蓋。100はかえりをもつもので、口径11.8cmを測る。焼成は良好で胎土に2mm大の砂粒を含む。101はゆるやかに屈曲させ、外反する端部をもつ。胎土は緻密で0.5mm程度の砂粒と海綿骨針を含む。102は頂部に回転ヘラケズリを施す。

103・104は杯A。103は底径5.0cmを測る小ぶりな底部から内湾気味に体部が立ち上がる器形で、いわゆる杯Gの可能性がある。焼成は良好で胎土に0.5~1mm程度の砂粒を含む104は口径11.9cm、器高3.0cm、底径8.0cmを測る。体部は下で屈曲し、やや外反気味に聞く。底外面は回転ヘラ切り痕をナデ消し、木目状圧痕が残る。焼成は良好で硬く焼き縮まる。胎土に0.5~2mmの砂粒と黒色粒を多く含む。

105は小型の壺肩部か。残存部の径で9cm程度となる。焼成は良好で胎土に黒色粒を含む。106は壺甌類の体部破片。内外面にロクロナデを施す。焼成は良好で胎土に0.5~2mmの砂粒を含む。107~109は甌体部片。107は、外面は平行叩き目の上からハケメもしくはカキメ、内面は同心円状當て具痕の上からハケメもしくはカキメを施す。108は外面に平行叩き目の上に一部ハケメを施し、内面は格子状の圧痕と同心円状當て具痕の上を一部不定方向にナデる。焼成は良好で硬く焼き縮まる。109は外面に木目の顯著に認められる平行叩き目、内面に同心円状當て具痕が残る。焼成はやや甘く灰黄褐色を呈する。

##### 土器類（110~143）

110~119は土師器碗。113は底径6.2cmを測る。底外面に回転糸切り痕が残る。焼成は良好で、胎土に海綿骨針を含む。117は回転糸切り痕が残る底部に高台を貼り付けて高台内側を強くナデ、深くえぐるもの。焼成は良好で明赤褐色を呈する。118は回転糸切り痕が残る底部に低めの高台を貼り付けるもの。119は底外面の周囲を折り返し、低い高台状になるもの。その他のものは口径14.0~15.9cm、底径5.0

~7.4cmを測る。いずれも摩滅が著しく調整等は不明だが、体部は下部がくびれ、内湾しながら立ち上がる器形である。いずれも10世紀後半頃のものと考えられる。

120~141は土器器皿。120はロクロ成形で口径9.4cm、器高2.2cm、底径4.3cmを測る。口縁部はやや内湾し、底外面に回転糸切り痕を残す。焼成は良好で明赤褐色を呈する。胎土に海綿骨針を含む。12世紀中頃のものか。121~126は口縁部の破片で、口径は9.0~13.7cmを測る。いずれも摩滅が著しいが、121の外面にはヨコナデが確認できる。127・128はやや厚く小径の底部で、底径はそれぞれ4.0cm、3.8cmを測る。どちらも胎土に海綿骨針を含む。128は焼成がやや甘い。129~141は底部破片。底径は4.0~7.4cmを測る。129~133は底外面に回転糸切り痕が確認できる。132は底部中央に焼成後に穿たれた三角形の穴がある。133は薄手、堅緻なもので、外面は橙色を呈し、赤彩の可能性がある。胎土に海綿骨針を含む。

142は高杯杯部の下半。摩滅が著しく調整は不明である。143は棒状を呈する鉢の把手。胎土には2mm前後の粗砂粒を多く含む。

#### 珠洲焼（144・145）

144は擂鉢である。口径28.4cmを測る。口縁部外端に面を取り、内端はつまみ出し爪状に仕上げる。焼成は良好で、胎土に海綿骨針を含む。珠洲焼の編年でⅡ期のものと考えられる。145は壺ないし壺の体部破片。外面に平行叩き目が残る。還元軟質な焼き上がりで灰白色を呈する。

#### 施釉陶器（146・147）

146は施釉陶器の耳付壺である。球胴状の胴部をもつ。器壁は薄く、内面にロクロナデ痕、外面下部にロクロケズリ痕がわずかに見える。外面肩部付近には一部粘土ひもの接合板を残す。また外面のロクロケズリ痕の上方には平行叩きを施したような痕跡が残る。肩部に施文を施した上に耳を取り付け、指先で成形してある。耳は基部が段違いに斜めに取り付けられており、形状も左右非対称で、無骨な印象を受ける。胎土は緻密で灰色を呈し、外面全体に薄く灰オリーブ色の釉がかかる。共伴遺物の時期から12世紀代までの範囲におさまるとすれば貿易陶磁の可能性がある。147は検出面で出土した鉢類の体部破片。内面及び外面上半に灰釉を施しオリーブ黄色を呈し、胎土は緻密で灰色を呈する。瀬戸美濃か。

#### 貿易陶磁（148~154）

148~153は白磁である。148・149は碗。148は高台径5.9cmを測り、外面下半は露胎となる。149は高台径5.5cmを測り、高台外面は部分的に露胎となる。148・149はいずれも高台は削り出しで断面は台形を呈する。150~152は皿。150は底径4.4cmを測り、見込みに花弁文が確認できる。151は底径4.0cm、152は底径4.4cmを測る。153は白磁碗皿類体部破片。いずれも12世紀代におさまると考えられる。

154は青白磁の小壺。高台径4.2cmを測る。素地は白色で、体部外面上半と内面に淡青白色の釉が厚くかかる。体部側面に蓮華文を浮き彫りにする。高台がある底部は型押し成形である。おそらくSD03出土のものと同一個体であろう。12世紀代におさまるものと考えられる。

#### その他の遺物（155~156）

155は土錘である。最大長4.9cm、最大径5.6cm、孔径1.6cmを測る。胎土に海綿骨針を含む。156は紙石か。現存長4.7cm、現存幅2.6cm、残存厚1.6cmを測る。欠損するが二面に平滑な面が残る。使用痕は認

められない。

SX01ではその他、鉄滓が2点、焼けた粘土塊が5点、炉壁の可能性がある粘土塊が2点出土している。またSX01の検出面で瓦が1点出土している（第4図）。この瓦については別項にて詳述する。

## [2] 上層遺構出土遺物

### SD01出土遺物（第19・20図、図版15・21・22）

SD01では223点の遺物が出土した。そのうち36点を図示した。

#### 須恵器（157～174）

157～163は杯蓋である。157～160はかえりをもつもの。口径は157が11.8cm、158が12.8cm、159が16.8cm、160は17.8cmを測る。いずれも焼成は良好で、胎土に0.5～1mm程度の砂粒を含む。7世紀後半のものであろう。161は口縁端部は折り曲げ外反させたタイプで、口径12.8cmを測る。非常に薄いつくりで、高めの器高をもつと見られる。焼成は良好である。162は扁平な器形をもち、口縁端部は外反する。口径は13.8cmを測る。焼成はやや甘い。163はゆるやかに屈曲させた短めの口縁端部をもつ。口径は14.8cmを測る。焼成は良好で堅緻である。

164・165は杯B身である。高台径は164が7.8cm、165が10.4cmを測る。どちらも焼成は良好で胎土に1mm前後の砂粒を含む。166は杯Aである。底径10.6cmを測る。焼成はやや甘い。167～172は杯類口縁部である。167・168は外傾する器形で壺瓶類の口縁部の可能性もある。170・171が還元焼質となる以外は焼成良好である。

173は無台の壺底部である。底径は8.0cmを測る。内外面に粘土塊が浮着し、自然釉がかかる。底内面向にロクロ目が明瞭に残る。胎土に2mm程度の砂粒を含む。焼成は良好である。174は壺瓶類の高台か。高台径12.0cmを測る。接合部で剥離したものである。焼成は良好で胎土に黒色粒を少量含む。

#### 土器類（175～190）

175は柱状高台をもつロクロ土師皿。高台径4.0cmを測る。摩滅が著しいが、底外面に回転糸切り痕が確認できる。焼成は良好で浅黄橙色を呈する。11世紀代のものと考えられる。176～178は土師器碗。176は高台径6.0cmを測る有台碗。底外面を回転糸切りした後、高台を貼り付け高台内面を強くナデる。10世紀後半頃のものと考えられる。177は口径11.8cm、178は底径5.6cmを測る。いずれも摩滅が著しい。

179～189は土師器皿。179はロクロ成形で、口径8.8cm、器高2.5cm、底径4.8cmを測る。口縁部はやや厚めに丸く成形する。底外面に回転糸切り痕が残る。胎土には1mm程度の砂粒と海綿骨針を含む。焼成は良好で全体に黄灰色を呈する。180は非ロクロ成形の土師器皿。底内面は刷毛を強くナデ、そのため中心部が隆起している。胎土に海綿骨針と0.2～1mmの砂粒を含み、焼成は良好で灰黄色を呈する。181は口径10.0cm、182は口径8.4cmを呈する。どちらも内湾する器形である。183～187は底径4.8～8.0cmを測る。いずれも摩滅が著しい。186は胎土に多くの海綿骨針を含む。

190は弥生土器もしくは古墳時代土師器の高脚基部である。胎土に2mm大の砂粒を多く含み、粗雑である。

#### 貿易陶磁（191）

191は白磁皿である。口径11.0cmを測る。口縁部は内湾し、端部は薄く成形する。12世紀代におさま

るものと考えられる。

#### その他の遺物（192）

192は円筒状の土製品。外径5.6cmを測り、中央に径0.6cmの穴を穿つ。断面を観察すると、開口している穴の横0.7cmの位置に途中まで穿たれた穴があることが確認できる。胎土は粗雑で摩滅が著しい。七製作錘車と考えられる。

その他、図化していないが竈の支脚と考えられる上製品が出土している。

#### SD02出土遺物（第20図、図版21・22、193～197）

須恵器が2点、土器類が44点、焼けた粘土塊が1点出土した。そのうち5点を図示した。193は須恵器杯B身。高台径7.6cmを測る。焼成は堅微で胎土に1～3mmの砂粒を含む。194～197は土師器椀。194は口径14.6cmを測り、やや内湾しながら立ち上がる。ロクロ成形である。口縁部外面に縫が付着する。焼成は良好でやや黄褐色を呈する。195も194とほぼ同一の器形をもつ。196は底径6.2cmを測り、摩滅が著しいが底外面に回転糸切り痕がかすかに確認できる。胎土に海綿骨針を含み、焼成は良好で浅黄褐色を呈する。197は底径5.2cmを測り、底外面に回転糸切り痕が残る。焼成は良好で浅黄褐色を呈する。

#### SP01出土遺物（第17図、図版19、98）

須恵器が1点、土器片が1点出土した。そのうち須恵器1点を図示した。98は杯蓋である。口径は16.4cmを測る。薄手の精緻なつくりである。口縁端部は三角形に成形する。胎土に1～2mmの砂粒を含む。

#### 土器だまり出土遺物（第20図、図版23・24、198～201）

土器だまりでは弥生土器もしくは土師器が86点出土した。そのうち4点を図示した。198～200は壺である。198は直立気味の口縁をもち口径14.8cmを測る。胎土に1～2mmの砂粒と赤色粒を少量含む。焼成は良好で橙色を呈する。外面とも摩滅が著しく調整は不明である。縫に半裁され、内面を上に向かって状態で出土した。199は「く」の字状口縁をもち口径15.0cmを測る。胎土に0.2～2mmの砂粒と赤色粒をわずかに含む。焼成は良好で灰黄色を呈する。外面とも摩滅が著しいが、外面にかすかにハケメ状の調整が確認できる。200は口径15.6cmを測る壺口縁部。胎土に3mm以上の粗砂粒と海綿骨針を含む。焼成は良好で浅黄褐色を呈する。摩滅が著しく内外面の調整は不明である。201は壺ないし壺の底部で、丸底である。胎土に2mm前後の砂粒を多く含む。外面は墨褐色、内面は褐灰色を呈する。摩滅が著しく内外面の調整は不明である。

#### (3) 遺構外出土遺物

##### 包含層II出土遺物（第20～22図、図版16・22・24・25）

包含層IIでは547点の遺物が出土した。そのうち52点を図示した。

##### 須恵器（202～226）

202～205は杯蓋である。202・203はかえりをもつもの。202は口径17.8cmを測る。外面に降灰し、部自然釉がかかる。体部はかえりが付く位置で屈曲している。焼成は良好で1mm程度の砂粒を含む。203は口径16.8cm、かなり高い位置にかえりが付く。焼成は良好で、胎土に0.5～1mm程度の砂粒を含む。

頂部に回転ヘラケズリを施す。204は小ぶりのつまみが付くが欠損しており形状は不明である。206～213は杯B身である。高台径は9.4～11.6cmを測る。いずれも焼成は良好で、胎土に0.5mm程度の砂粒を含む。207は八の字に開くしっかりしたつくりの高台をもつ。210は底外面に回転ヘラ切り痕が堅調に残る。214・215は杯Aである。底径は214が8.4cm、215が5.8cmを測る。214は焼成良好で胎土に2mm程度の砂粒を含む。215は焼成が不良で外面は黄灰色、内面が橙色を呈する。胎土に0.5mm程度の砂粒と海綿骨針を含む。216～220は杯類の口縁部破片。口径は10.0～16.8cmを測る。217は大きく傾く器形をもつ。いずれも焼成は良好で、胎土に0.5～3mmの砂粒を含む。

221は瓶類の頸部破片。222は瓶類の肩部破片。外面に自然釉がかかる。焼成は良好である。223・224は鉢類の口縁部である。223は口径26.0cmを測る。内外面にロクロ目が顕著に残る。還元軟質で灰白色を呈する。224は口径22.4cmを測る。内外面にロクロ目が顕著に残る。焼成はやや軟質で灰白色を呈する。胎土に1～3mm程度の砂粒を含む。225は壺の底部。焼成は還元軟質で灰白色を呈する。外面に平行叩き目、内面に同心円状当て具痕を残す。丸底の底部は叩き目が磨耗して磨り減っている。226は壺の口縁部。口径32.0cmを測る。口縁端部は丸くおさめる。焼成はやや不良で一部にぶい黄橙色を呈する。胎土に3mm程度の砂粒を含む。

#### 土器類（227～233）

227～231は弥生土器もしくは古墳時代土器である。227は有孔鉢の底部、228は壺ないし壺の底部、229は壺ないし壺の口縁部、230は高杯脚部、231は高杯の杯部下半。227は外面にかすかにヘラケズリの痕跡が残る。その他は磨滅が著しく表面調整は不明である。229は胎土に海綿骨針を含む。

232は土器器楕。口径14.2cm、器高4.0cm、底径6.0cmを測る。胎土に海綿骨針を含み、焼成は良好で橙色を呈する。口縁は直線的に伸び、体部下半にくびれをもつ。表面の摩滅が著しく調整は不明だが、ロクロ成形であろう。12世紀末頃のものと考えられる。

233は器種不明の土器である。細くすばまる柱状部から大きく開く器形をもち、柱状部の内面には粘土ひもの接合痕を明瞭に残す。胎土には海綿骨針を含み、橙色を呈する。外面とも磨耗しており、調整は不明である。富山県埋蔵文化財センターで造物を実見していただいたところ製塩土器ではないかという意見を得たため、実測図は柱状部を下に向かた形で図化したが、高窓などの脚部である可能性もある。

製塩土器だとした場合、棒状尖底製塩土器の一種と考えられる。氷見市の九殿浜遺跡などで出土している棒状尖底製塩土器と比較すると、幾分胴部（上記の柱状部）が細く短い。また口縁部の開きが大きい。内陸に立地する本遺跡から出土したことは、消費地として搬入されたためと推測される。

#### 珠洲焼（234～237）

234・235は擂鉢である。234は半球状の器形をもち、底径8.0cmを測る。底外面の切り離し痕は曲線的だが回転糸切りか静止糸切りかは判断できない。卸目は認められない。焼成は良好である。珠洲焼の編年でI期のものと考えられる。235は底径7.8cmを測る。器壁は直線的に開くタイプで、底外面に静止糸切り痕が残る。焼成は良好で胎土に海綿骨針を含む。こちらも卸目は認められず、珠洲焼の編年でI期のものだろう。

236はロクロ成形の壺胴部破片。肩部、底部付近の形状は不明だが、垂直に直線的に立ち上がる器壁をもつ。焼成は良好で褐灰色を呈する。内面には黒色の鉄分の粒が吹き出している。外面ともロクロ目を残す。237は壺ないし壺の体部破片。外面に平行叩き目が残る。焼成は良好である。

#### 貿易陶磁（238～248）

238～241は白磁碗である。いずれも小型の玉縁状口縁をもつ。238は口径15.6cm、239は口径13.8cmを測る。242～244は白磁皿である。242は底径5.0cm、243は底径4.0cmを測る。244は見込に描き状の文様を施す。245・246は白磁碗皿類体部破片である。いずれも12世紀代のものと考えられる。

247・248は青磁碗。247は細片のため詳細は不明であるが、内外面に施釉されオリーブ灰色を呈する。248は外面に鶴蓮弁文を施す龍泉窯系の碗。口径14.0cmを測る。釉は酸化してにぶい黄色を呈する。12世紀末～13世紀前半頃のものと考えられる。

#### その他の遺物（249）

249は輪の羽口である。外径7.9cm、内径2.6cmを測る。胎土は砂っぽく、1mm大の砂粒を含む。外面は被熱して硬く焼き締まっている。

その他包含層Ⅱからは焼けた粘土塊が2点出土している。

#### 包含層Ⅰ出土遺物（第22～24図、図版22・24・26～28）

包含層Ⅰでは426点の遺物が出土した。そのうち77点を図示した。

#### 須恵器（250～300）

250～264は杯蓋である。250・251はかえりをもつもの。口径は250が17.8cm、251が15.0cmを測る。252はやや外反する口縁端部をもち、口径14.0cmを測る。253・254は小型の製品。口径は253が11.7cm、254が11.2cmを測る。どちらも焼成は堅密で胎土に0.5～1mm程度の砂粒を含む。口縁端部は253が外反、254は断面三角形に仕上げる。255は折り曲げた口縁端部をもち、焼成はやや甘い。256は外面に突帯をもつ特殊品。つまり、口縁端部は欠損しているため詳細は不明である。259は外面に帯状の回転ヘラケズリを施す。

265～275は杯B身である。265は八の字に開くしっかりした高台をもつもの。底外面には回転ヘラ切り痕が残る。焼成は良好である。その他は高台径7.2～12.0cmを測る。270は還元軟質の焼き上がりで灰白色を呈するが、それ以外のものはいずれも焼成は良好である。

276～287は杯Aである。276は底径10.0cmを測る大型品。焼成はやや甘い。285は底径7.0cm、薄手の器壁をもつ小型のものである。こちらもやや焼成は甘い。287は底径6.6の小径の底部から斜めに開く器形で、底部付近はくびれる。還元軟質の焼き上がりで灰白色を呈する。その他のものは底径6.6cm～11.4cmを測り、いずれも焼成は良好である。

288は壺類の口縁部か。口径15.8cmを測る。還元軟質の焼き上がりで灰白色を呈する。289は杯類の口縁部。口径13.0cmを測る。直立気味の器形をもち、焼成は堅密である。290は無台の壺底部。底径10.7cmを測る。外面に粘土塊が溶着している。外面は、上部にかすかに平行叩き目が残り、その下はヨコナデ、底部付近は回転ヘラケズリを施す。内面はロクロナデを施した後、下部を指頭で強く不定方向にナデる。焼成は良好で外面の一部に自然釉がかかる。291は壺瓶類の肩部。ロクロ成形で焼成は良好である。292は有台の壺瓶底部。高台径15.0cmを測る。胎土に1～3mmの砂粒を含む。焼成は良好である。

293～296は横瓶の体部破片である。293は、外面が不定方向のハケメ調整で一部に平行叩き目が残り、内面が体部の長軸方向に平行するハケメ調整を施す。焼成は良好である。294は、外面がカキメ調整、内面が、側面は不定方向のナデ、体部内面がカキメ調整を施す。焼成は良好である。295は外面に自然釉がかかる。調整は外面が平行叩き目の上にカキメを施し、内面は同心円状当て具痕が残る。焼成

は良好である。296は外面にカキメ、内面に同心円状當て具痕が残る。

297は壺の口縁部。焼成は良好で胎土に1mm程度の砂粒を含む。298~300は壺の体部破片。いずれも内面に同心円状當て具痕、外面に平行叩き目を残し、焼成は良好である。

#### 土器類（301~308）

301~307は弥生土器もしくは古墳時代土器器である。301は鉢か。口径11.8cmを測る。外反する口縁部はヨコナデ調整を施し、外面下半はハケメ調整を施す。胎土に0.5~1mmの砂粒を含む。焼成は良好で、外面がにぶい黄橙色、内面が褐灰色を呈する。302は壺口縁部か。口径22.2cmを測る。摩滅が著しい。焼成は良好で浅黄橙色を呈する。303は壺口縁部で、口径11.0cmを測る。胎土に海綿骨針、1mm程度の砂粒を含む。摩滅のため調整は不明である。焼成は良好で淡黄色を呈する。304は壺底部。外面にハケメ調整を施す。胎土に海綿骨針を多く含み、3mm程度の砂粒を少量含む。焼成は良好で灰黄褐色を呈する。305は壺ないし壺の底部。底径2.9cmを測る。胎土に海綿骨針と1~2mm程度の砂粒を含む。焼成は良好でにぶい黄橙色を呈する。306は高杯の脚基部。摩滅のため調整は不明で、胎土に1mm程度の砂粒を含む。焼成は良好で橙色を呈する。307は壺ないし壺の口縁部か。口径16.8cmを測る。細片であり、摩滅のため詳細は不明である。胎土に海綿骨針、1~2mm程度の砂粒を含む。

308は土師器皿である。摩滅が著しく表面調整は不明だが、ロクロ成形と考えられる。底径4.4cmを測る。焼成は良好で橙色を呈し、胎土に赤色粒を含む。

#### 珠洲焼（309~314）

309~312は擂鉢である。309は片口の破片。焼成は還元軟質で、灰白色を呈する。310は口縁部破片。口縁部外端に面を取り、内面は軽くつまみ出す。珠洲焼の編年でⅡ~Ⅲ期のものか。311は壺底部か。底外面に回転糸切り痕を残す。焼成は良好である。312は擂鉢底部。底外面に静止糸切り痕を残し、内面は鉗目が確認できず、自然釉がかかる。いずれも珠洲焼の編年のⅠ期のものか。

313は壺口縁部。口径20.0cmを測る。口縁端部は外側に引き出し丸みを帯びた形状に成形する。焼成は良好で胎土に海綿骨針を含む。314は壺ないし壺の体部破片。外面に平行叩き目、内面に當て具痕が残る。焼成は良好で胎土に海綿骨針を含む。

#### 貿易陶磁（315~324）

315~317は白磁碗である。315は口径15.7cmを測り、小型の玉縁状口縁をもつ。316は体部破片。317は底部破片である。高台は径6.4cmを測り、削り出しで断面は台形を呈する。318~320は白磁皿である。318は口径9.8cm、外面下部は露胎となる。319は口径10.0cm、320は底径5.2cmを測る。318~319はどちらも内湾する口縁部をもち、端部を薄く仕上げる。321~323は白磁碗皿類の体部破片である。324は青磁碗か。白磁はいずれも12世紀代におさまると考えられる。

#### その他の遺物（325~328）

325・326は近世燃器碗である。325は口径12.0cmを測る口縁部破片。端部が軽く外反する。326は高台径4.3cmを測る染付碗の底部で、底外面には銘款が入る。両者は同一個体の可能性がある。327は近世陶器、外面にオリーブ黒色の釉を施し、内外面にロクロ目が残る。328は越中瀬戸の匣鉢である。底径は9.7cmを測る。内外面に鉄釉を施し、底外面は露胎で回転糸切り痕が残る。

その他包含層Ⅰからは鉄滓が6点、炉壁の可能性がある粘土塊が4点出土している。

#### 表土中出土遺物（第24図、図版22・28）

表土中から34点の遺物が出土した。そのうち10点を図示した。

#### 須恵器（329～333）

329・330は杯蓋。329はかえりをもつもので、口径は17.8cmを測る。331は杯B身。高台径7.0cmを測る。332は杯A。底径7.0cmを測る。333は瓶頸の体部破片。内面に同心円状當て具痕、外面上にナデ、平行叩き目が残る。

#### 珠洲焼（334・335）

334は蓋ないし壺体部破片。外面に綾杉状の平行叩き目を残す。335は擂鉢底部。底径12.0cmを測り、内面に10条一単位の鉢目、底外面に静止系切り痕が残る。珠洲焼の編年でⅡ～Ⅲ期のものと考えられる。

#### 貿易陶磁（336・337）

336は白磁椀である。口径16.6cmを測り、小型の玉縁状口縁をもつ。337は白磁椀皿類の体部破片である。

#### その他の遺物（339）

339は近世陶器。小型の壺類の口縁部か。口縁部は露胎で、外面下部に鉄釉を施す。表土中からはこの他に鉄滓が1点、炉壁の可能性がある粘土塊が1点出土している。

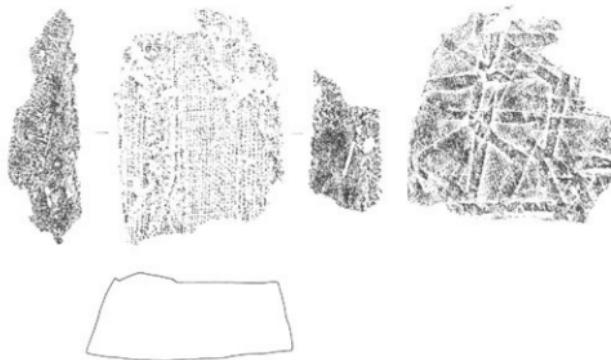
#### 表探遺物（第24図、図版28、338・340・341）

調査区付近で遺物を30点表探した。そのうち須恵器を2点、白磁を1点図示した。340は長頸瓶の頸部である。341は短頸壺の口縁部である。口径10.2cmを測る。338は白磁椀皿類の体部破片である。

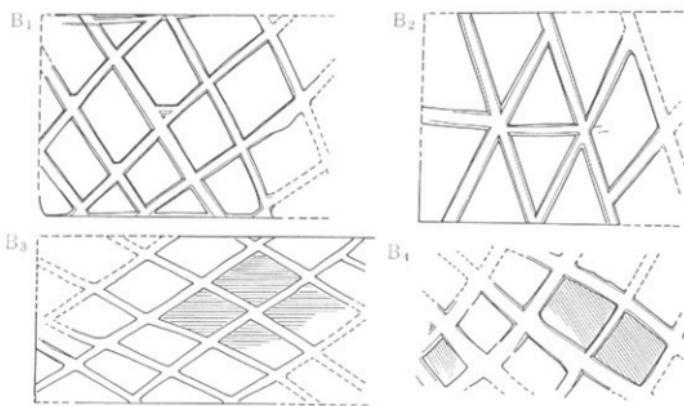
#### (4) SX01出土の瓦について

SX01の検出面で瓦が一点出土した（第4図）。残存長10.4cm、最大幅は凸面で8.7cm（凹面の最大幅は6.9cm）、厚さは3～3.5cmを測る。胎土は砂っぽく、混入物は少ない。焼成は還元焼質で灰色を呈する。凸面に斜格子叩き目、凹面に布目が残る。凹面には段差があり一段高くなっている箇所がある。これは桶巻き作りの際の桶の段差の跡であると考えられ、その面には布目は残らない。左右の端面は、横断面と平面観が台形状になるように切り落として面を取り、そのうち片面では長軸方向の糸切り痕が確認できる。SX01第1層中に10cm前後の礫が多く含まれており、瓦はその礫に混入していたものと考えられる。

新保南遺跡とは上庄川をはさんで750m西に小窪瓦窯跡、600m北西に小窪廃寺が所在する。小窪瓦窯跡は、地ド式有段窯窓と推測される窯体が残存しており、平瓦、丸瓦の破片が採集されている。小窪廃寺は、小窪瓦窯の北300mの地点にあり、昭和40年代の圃場整備の際に大量の瓦が出土したが、低地上に埋めたといわれ、現在では表探資料として平瓦、丸瓦の破片が残る。瓦が出土した地点の近くに通称「塔のスマ」と呼ばれる場所があり、この場所から飛び出された小窪廃寺の塔心礎が小久米神社の境内に置かれている。塔心礎は、直径約160cmではほぼ円形に整形されており、平らな上面に直径約82cmの柱穴を穿つ。柱穴の大きさは北陸では最大級のもので、一説には塔高は30m前後と推定される。



第3図 SX01出土瓦実側図 ( $S=1/2$ )



第4図 小窯瓦竪平瓦叩き目分類図 ( $S=1/2$ 、西井1987bより)

小窪瓦窯跡では4種類の斜格子叩き目が確認されており(第5図)、そのうちB1、B3、B4の叩き目と同一の叩き目をもつ平瓦が小窪廃寺にあり、小窪瓦窯と小窪廃寺が需給関係にあったことがうかがわれる。小窪瓦窯の採業時期は7世紀末から8世紀前半頃と推定される。小窪廃寺では、小窪瓦窯では見られない繩叩き目をもつ破片も探集されており、小窪瓦窯以外の窯跡が近くに存在する可能性がある(西井1987a・b、水見市2002)。

SX01出土の瓦は、叩き日の太さ、格子の間隔、幅、木目の方向などから、小窪瓦窯・小窪廃寺の叩き目B3にあたると推測される。B3は小窪瓦窯・小窪廃寺双方で確認されている叩き目で、木目が顕著という特徴がある。この瓦では、このB3の叩き板を用いて、位置、方向をずらしながら、残存している箇所で少なくとも10回叩いていることが確認できる。叩く方向は大きく三方向あり、一定の法則があると推測される。これまで小窪瓦窯・小窪廃寺で確認されている瓦では同一箇所を複数回叩くものがほとんどなく、同一の叩き板で重複して叩いていることがこの瓦の特徴といえるが、これが瓦の種類の特殊性なのか、瓦の部位による違いなのかは判断できない。また、凹面の布目は、3cmあたり縦21本、横24本前後であり、これは小窪瓦窯・小窪廃寺の平瓦と共通するものである。

以上から、この瓦が小窪廃寺及び小窪瓦窯の平瓦と共通する叩き板、布を用いて製作されており、おそらく小窪瓦窯で生産されたものであると推測できよう。ただ、胎土は、SX01出土のものは砂っぽい粗雑なもので、小窪瓦窯・小窪廃寺の瓦とは印象が異なっており、異なる粘土が用いられている可能性がある。

さて、今回出土した瓦は、左右が面取りされて幅が非常に狭く、厚みが大きく感じられる。このうち厚みに関しては、厚さ3~3.5cmとこれまで小窪瓦窯・小窪廃寺で探集された平瓦の厚さ1.5~3.5cmからすると厚い部類ではあるが、平瓦として妥当な数値である。問題は横幅の狭さで、端面及び凹面凸面それぞれの観察からは、これが焼成前に面取りされたものだと考えられる。これは平瓦製作の際に何らかの理由(平瓦の幅、形状の調整など)で切り落とされたものが窯で焼かれたのか、もしくは当初よりこの幅、形状を意図して製作されたかの二通りが考えられよう。この形状が意図したものであるとすれば、熨斗瓦などの道具瓦の一種であると考えられる(熨斗瓦は平瓦を焼成前もしくは焼成後に縦に半裁したものが用いられる例がある)。断言はできないが、前述した叩きの特徴からも、これが通常の平瓦とは異なった種類の瓦である可能性は高いのではないだろうか。また、観察から端面の面取りは焼成後のものではないと判断したが、焼成後に面取りされたものであるとすれば、瓦が廃棄された後に砾石などに転用されたため面が生じた可能性が残ることを付け加えておきたい。いずれにせよ現在確認できる小窪瓦窯・小窪廃寺の瓦は数が少なく、詳細な検討に関しては今後の資料の増加を待ちたい。

## 第4章　まとめ

調査で得られた知見を整理すると次のようになる。

1. 今回の調査では、上下2層の遺構面を確認した。下層では流路、溝、柱穴列、土坑、ピット群を、上層では溝、ピット群、土器だまりを検出した。明確な建物跡は確認していないが、下層の柱穴列は調査区南側に延びる擅立柱建物の可能性がある。出土遺物の時期から下層の遺構で13世紀前半頃の廃絶と推測される。また上層下層の時期差は小さいと考えられる。
2. 遺構、包含層から須恵器、土器類、珠洲焼、貿易陶磁等が出土した。土器類は摩滅が著しく、年代の判定をできないものが多かったが、古代後期の土師器碗、中世前期の土師器皿を確認した。年代の判定できる遺物の時期は、7世紀後半と12世紀末に集中し、そのほか10世紀後半から12世紀前半及び13世紀前半の土師器が出土しており、珠洲焼はⅠ期とⅡ期のものが確認できる。調査では古代の遺構は確認していないが、本遺跡はおそらく7世紀後半から13世紀前半頃までの間に断続的に営まれたと推測される。これまで水見では10世紀代から12世紀代の遺跡は確認されておらず、本遺跡で出土した当該期の遺物は古代後期の水見を明らかにするうえで貴重な資料といえよう。また、白磁を中心とした貿易陶磁がまとめて出土しており注目される。これらはおおむね、12世紀代におさまるものと考えられる。
3. 今回の調査で、摩滅が著しく時期を断定することはできなかったが弥生土器ないし古墳時代土師器と考えられる土器が出土している。本遺跡の立地する上庄川中流域では弥生時代の遺跡はこれまで確認されておらず、近隣に未発見の弥生時代の遺跡が存在することが推測される。また古墳時代には遺跡の背後の丘陵において古墳時代中期を中心とするイヨダノヤマ古墳群、速川神社古墳群が築造されており、本遺跡との関連が注目される。
4. 西側の丘陵斜面には本遺跡に面して新保横穴群が立地しており、平成13年度に水見市教育委員会が実施した分布調査では從来知られていた2基の横穴を再確認している。横穴群では遺物は出土しておらず時期は不明であるが、本遺跡は横穴群の眼下に立地するため、両者が密接に関係していたことが推測される。
5. 今回の調査で、瓦が1点出土した。これは小窪瓦窯・小窪廢寺の瓦と共通の叩き目をもち、おそらく小窪瓦窯で生産されたものであろう。小窪瓦窯の操業時期は7世紀末から8世紀前半と推定されており、その直前、7世紀後半から末頃に一つのピークを持つ本遺跡は、小窪廢寺の造営に密接にかかわった集落である可能性がある。
6. 本遺跡の南側の丘陵は滝尾山とよばれる。ここには中世に四十八の寺坊があったが、上杉の兵火にかかり廃絶したと伝えられ、現在でも周辺一帯には金剛坊、観光坊、護摩堂、講堂跡、行塚といった俗称地名が残っている。過去には周辺で金銅仏、銅鏡、土師器、太刀などが出土、採集されている。また本遺跡の所在する通称伊尾田では、昭和初年に耕地整理された際に南東の堂の池と呼ばれる池で懸仏、石造物が出土している。その石造物は新保神明社の境内に集められており、現在確認できるものは五輪塔残欠（火輪4、水輪2、地輪1）、一石一尊仏2、オベリスク状板石塔婆4で、その他自然石と判別不能なものが数個ある。おおむね14世紀後半から15世紀代のものであろう。滝尾山と13世紀前半には廃絶したと考えられる本遺跡との直接の関連は不明であるが、伊尾田には新保領側から滝尾山への参道がついていたといい、何らかのつながりが予測される。滝尾山の開基がどれだけ遡り得るかなども含めて、今後の課題としたい。
7. SD01、SD03、SX01、包含層Ⅱから鉄滓、轍の羽口、炉壁の可能性がある粘土塊が出土している。これらは本遺跡周辺で製鉄を行っていたことを示唆するものと考えられる。今回の調査では製鉄に関

連する明確な造構は確認していないため、製鉄が行われた時期は不明であるが、他の遺物と造構の時期からは古代から中世前期までの時期が推測される。今回の調査で出土した製鉄関連の遺物は少量であるため、製鉄に関しても可能性として捉えておきたい。

以上であるが、周辺の遺跡を含めて上庄川中流域の様相についてまとめてみたい。

本遺跡が所在する上庄川中流域は、古墳時代前期以来継続して古墳群、横穴群が築かれており、さらにはほぼ継続して古代には小窪磨寺が造営された。これは、比較的まとまつた平野をもつこと、氷見と羽咋を結ぶ交通ルートである之手路（志雄路）の陸運、上庄川の水運などが背景となっていると考えられる。

古墳時代から律令社会へと転換していく中で、仏教を新たな支配秩序として、国家的な仏教政策がとられた。仏教は地方にも浸透し、7世紀後半には各地で在地の豪族が古墳にかわる權威の象徴として氏寺を築いていった。氷見におけるその典型を本地域の様相に見ることができる。そしてそれは、上庄川中流域を支配し、古墳群、横穴群から引き続いて寺院を造営する力をもった有力氏族が本地域に存在していたことを示すものであろう。

さて、小窪磨寺では造寺に際して隣接する場所に瓦專業の窯を操業している。北陸の瓦生産は、在来の須恵器生産を基盤として消費地である寺院とは離れた場所で操業される瓦陶兼業窯が一般的であった。その一方で小窪瓦窯は、小窪磨寺造営のため当地に造瓦工人を呼び寄せ、比較的短期間で瓦を生産したものと考えられる。權威の象徴である寺院を造営し、そのため工人を招聘して新たな窯場を操業することを成し得た勢力とははたしてどのようなものであったか。

万葉集巻十九に射水郡大領安努君広鷦の名が見える。<sup>あゆのひろとり</sup>安努君広鷦は天平勝宝3年(751年)、越中國司の任を終え都へ出発しようとする大作家持の送別の宴を催している。大領とは郡の長官で、国司のもとで郡の行政を担当する役職であった。安努君広鷦は、氷見を含む当時の射水郡の長官として大きな力をもっていたと考えられる。中世、上庄川流域を中心として阿努莊という莊園が広がっており、本地域もその中に含まれると推測されるが、中世阿努莊と古代安努氏一族の勢力範囲が重なるとすれば、古代において上庄川中流域を支配し、小窪磨寺を造営した勢力が安努君広鷦に連なる安努氏一族であった可能性は高いといえよう。

新保南遺跡は、以上のような背景をもちながら、古墳時代から13世紀前半まで長期間にわたって何らかの土地利用があったと考えられる。今回の調査は圃場整備によってやむを得ず削平されてしまう最低限の箇所の発掘調査であったため、断片的な情報しか得ることはできず、本遺跡の性格を知る上で不十分な点が多い。だが、市内でも各時代を通して重要な位置を占めていたと考えられる上庄川中流域において、古墳群、横穴群、古代寺院、中世寺院に囲まれ、それらと密接にかかわりをもったと推測される本遺跡の大部分が、現状のまま保存されるということをまず喜びとしたい。今後は、周辺の遺跡の調査をすすめ、その結果をふまえて上庄川中流域の歴史を明らかにしていく必要があろう。

## 引用・参考文献

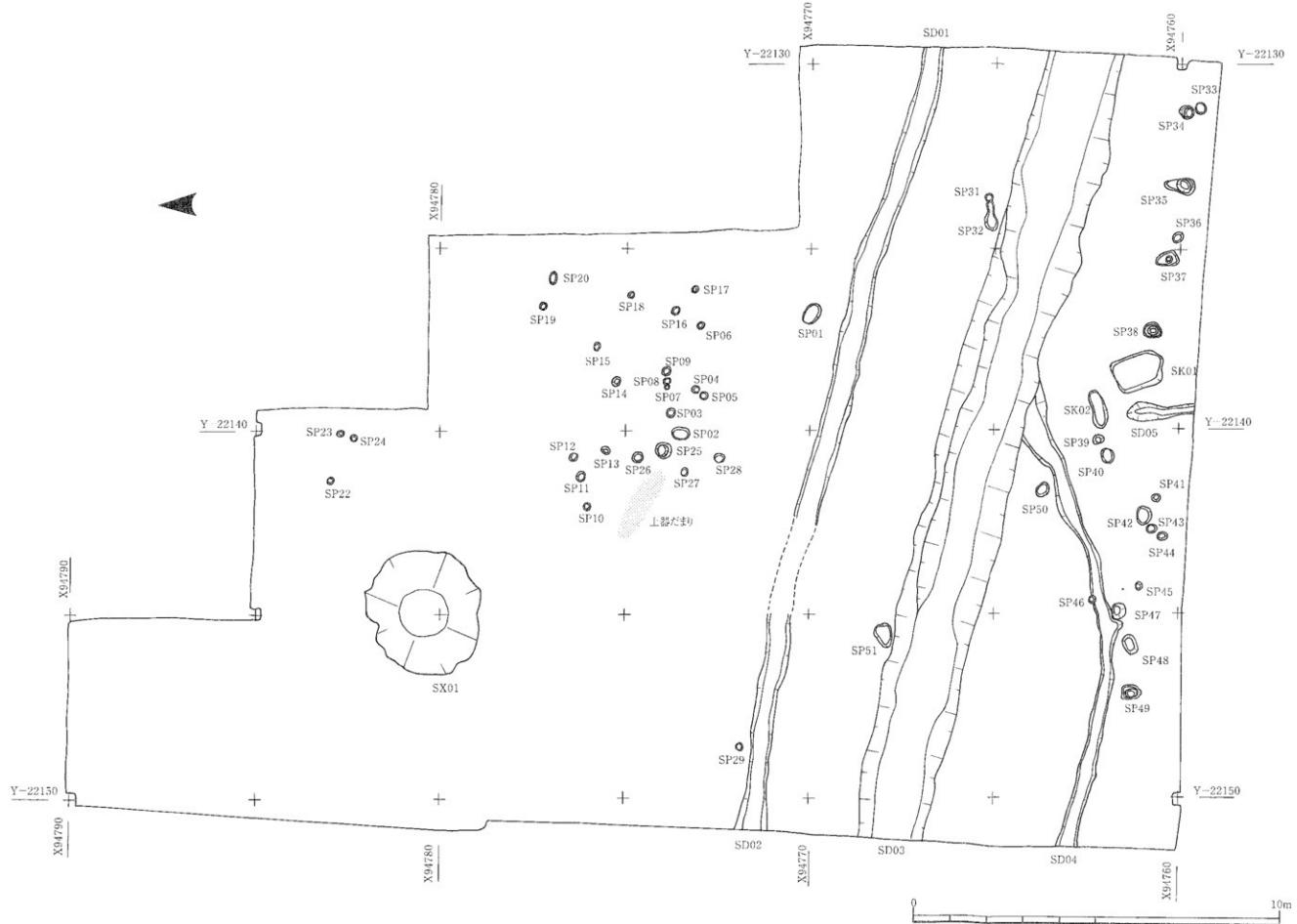
- 上原真人 1997 「瓦を読む」歴史発掘11 講談社
- 大野究 1993 「朝日湯山古墳・中村天場山古墳測量調査の結果」『水見市遺跡地図〔第2版〕』  
水見市教育委員会
- 大野究 1998 「イヨダノヤマ3号墳」『水見市立博物館年報』第16号
- 京都国立博物館編 1986 『京都国立博物館蔵 絹塚造宝』臨川書店
- 熊無村史刊行委員会 1997 『熊無村史』
- 国立歴史民俗博物館 1994 「日本出土の貿易陶磁」 国立歴史民俗博物館資料調査報告書5
- 富山県文化振興財団 1996 「梅原胡麻堂遺跡発掘調査報告(遺物編)」埋蔵文化財発掘調査報告第7集
- 富山県文化振興財団 1998 「五社遺跡発掘調査報告書」 埋蔵文化財発掘調査報告書第9集
- 西井龍儀 1971 「水見市谷屋発見の子持勾手」『考古学ジャーナル』No.54
- 西井龍儀 1987 a 「小窪廃寺」『北陸の古代寺院 その源流と古瓦』桂書房
- 西井龍儀 1987 b 「小窪瓦窯跡」『北陸の古代寺院 その源流と古瓦』桂書房
- 日本貿易陶磁研究会 1998 「貿易陶磁研究」第1号-第5号(合本)復刻版 六一書房
- 橋本秀雄 1955 「小窪廃寺の心礎と瓦窯跡」『越中史壇』5号
- 遠川村史編集委員会 1987 『遠川村史』
- 林喜太郎 1930 「熊無村横穴古墳」『富山県史蹟名勝天然紀念物調査報告』第10号
- 水見市 1963 『水見市史』
- 水見市 1998 『水見市史』3 資料編1 古代・中世・近世1
- 水見市 1999 『水見市史』9 資料編7 自然環境
- 水見市 2000 『水見市史』6 資料編4 民俗・神社・寺院
- 水見市 2002 『水見市史』7 資料編5 考古
- 水見市教育委員会 2001 『新保南遺跡 中山間地域総合整備事業に伴う試掘調査概要』  
水見市埋蔵文化財報告第34冊
- 水見市教育委員会 2002 『水見市埋蔵文化財分布調査報告(丘陵地区) II』  
水見市埋蔵文化財調査報告第35調
- 水見市教育委員会 2003 『図説 水見の歴史・民俗』
- 福光町教育委員会 2001 『富山県福光町在房遺跡 I』 県営は場整備事業(扭い手育成形)  
北山田北部地区に伴う埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告(1)
- 北陸古瓦研究会編 1987 「北陸の古代寺院 その源流と古瓦」桂書房
- 北陸中世土器研究会編 1997 『中・近世の北陸 考古学が語る社会史』桂書房
- 吉岡康暢 1994 『中世須恵器の研究』吉川弘文館



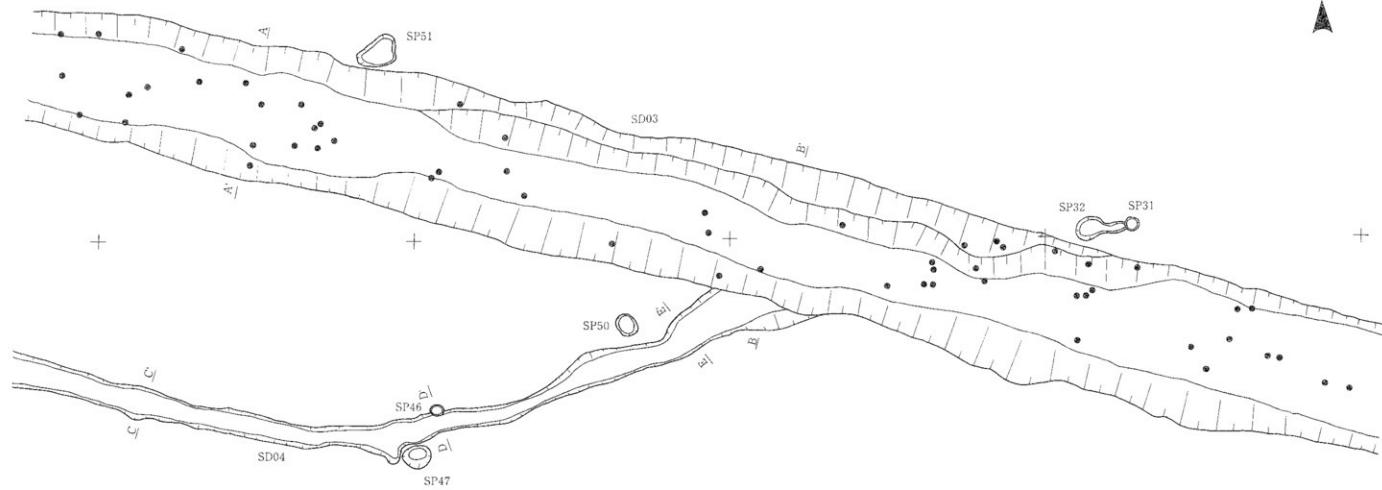
第5図 遺跡の範囲と調査区 (S=1/2500)



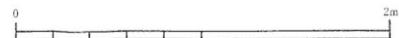
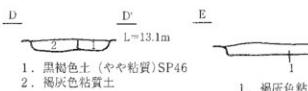
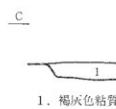
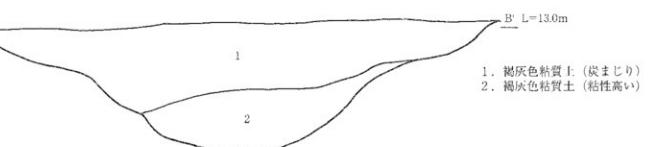
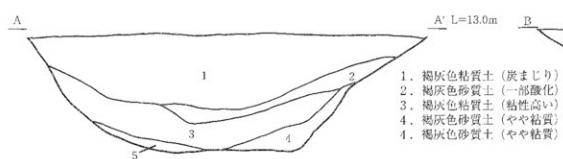




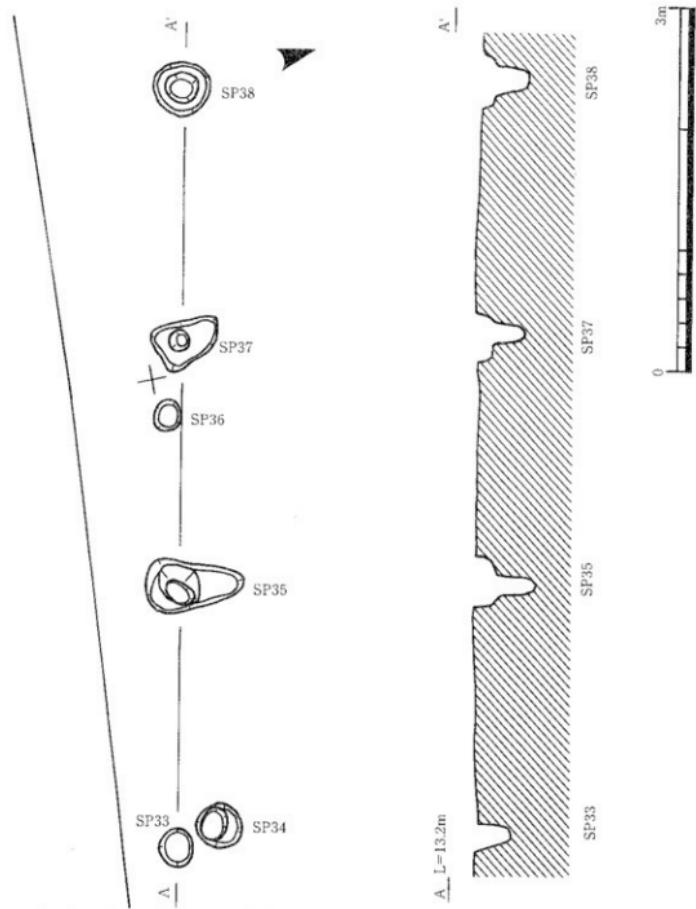
第6図 遺構全体図 (S=1/100)



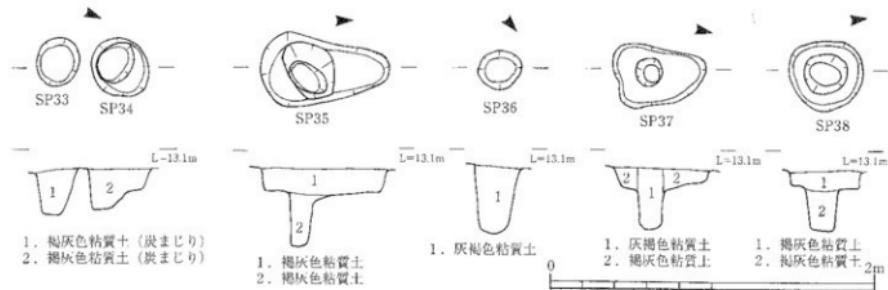
●は遺物出土地点



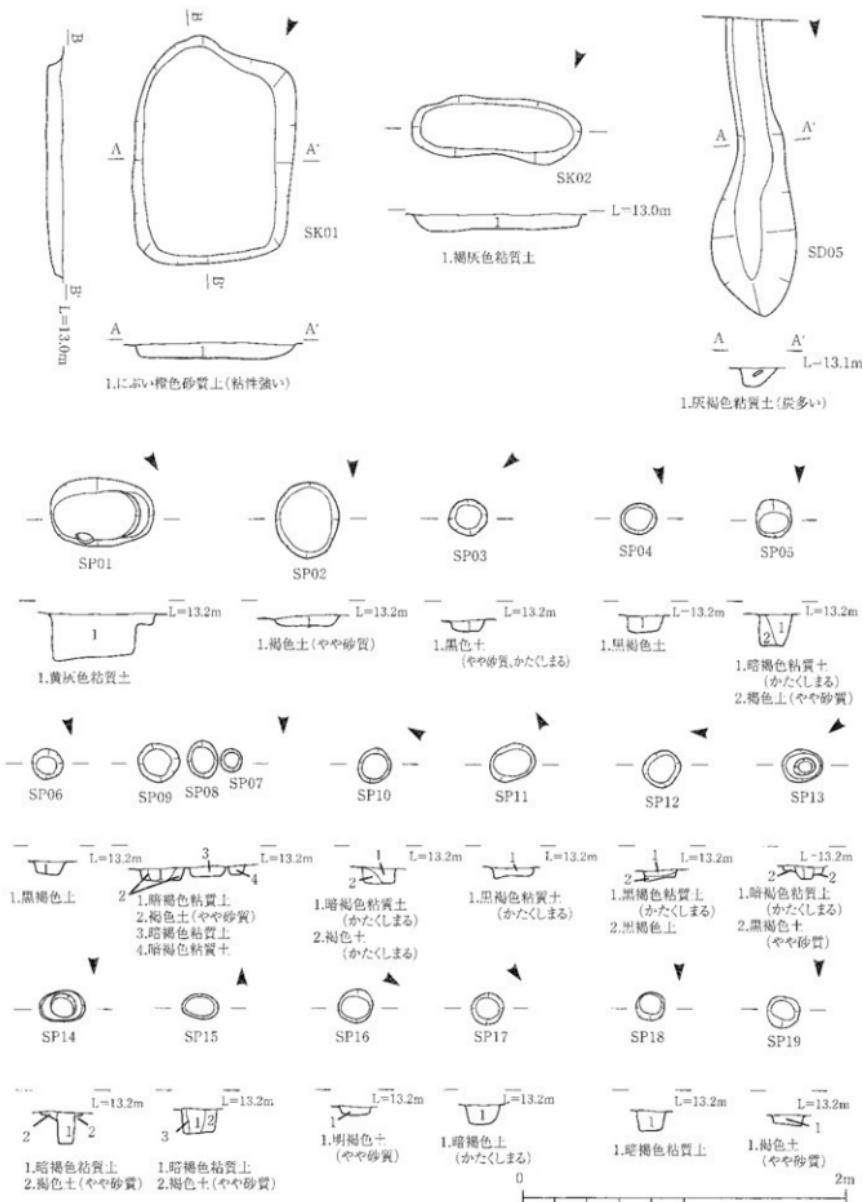
第7図 遺構実測図 (1) SD03・04 (平面図 S=1/60、断面図 S=1/20)



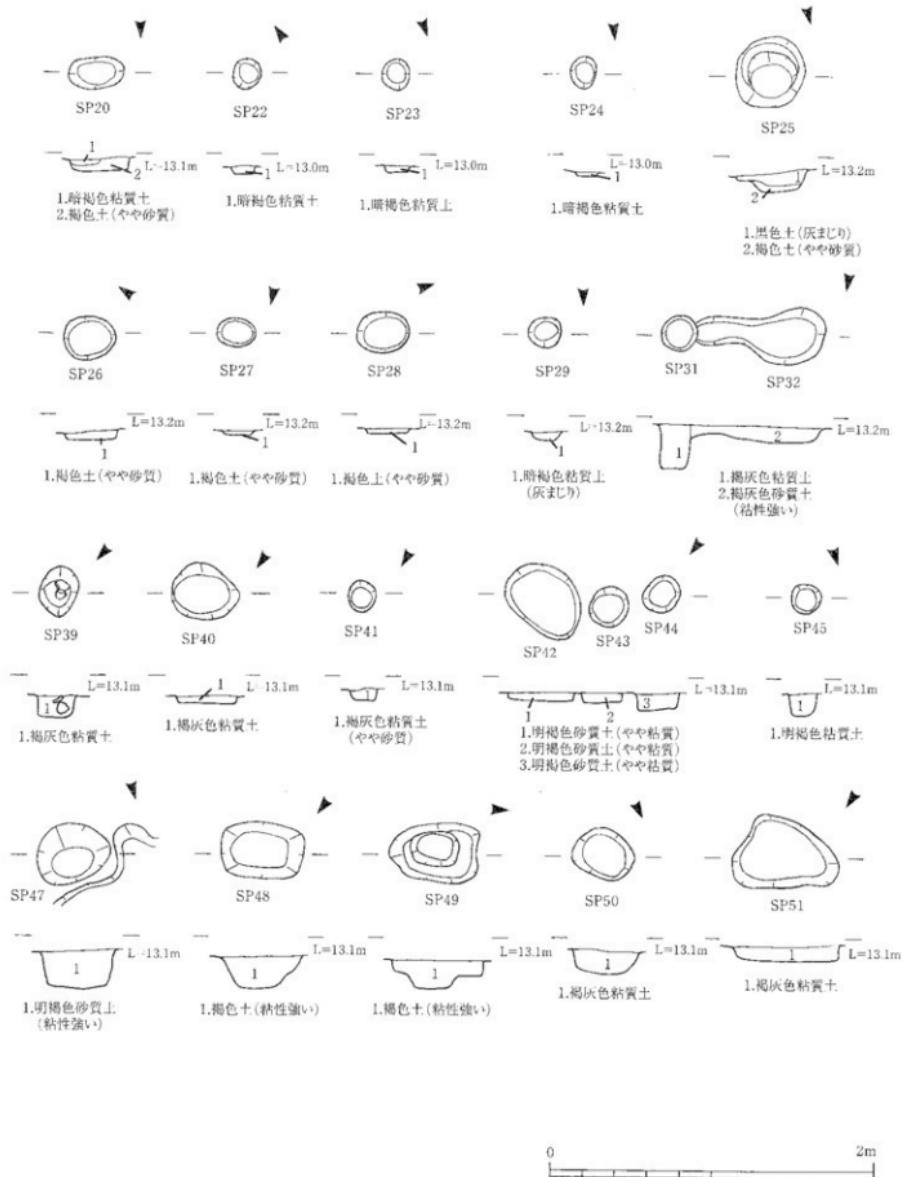
第8図 遺構実測図(2) 柱穴列 ( $S=1/40$ )



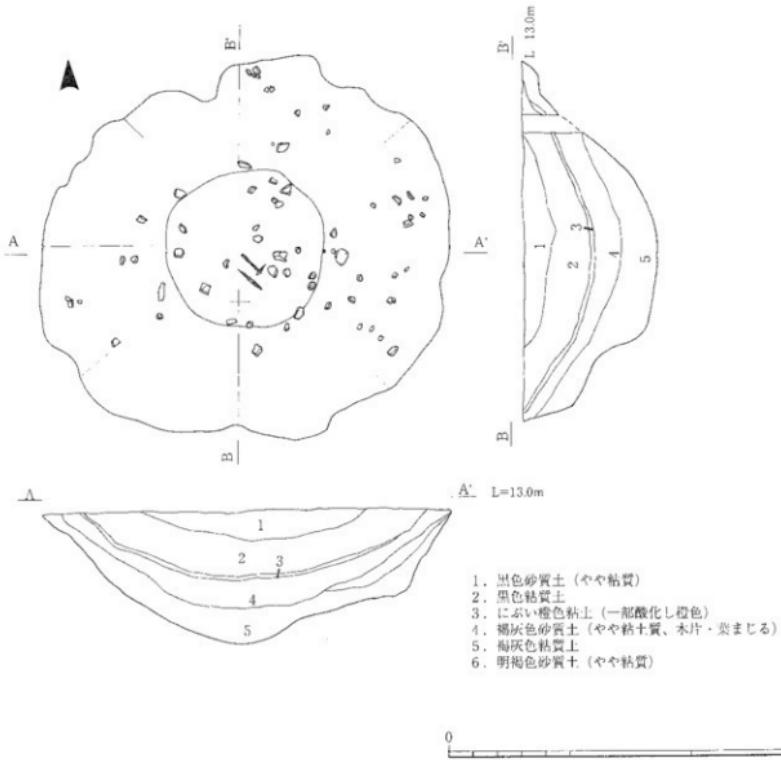
第9図 遺構実測図(3) SP33~38 ( $S=1/30$ )



第10図 遺構実測図 (4) SK01・02、SD05、SP01~19 (S=1/30)



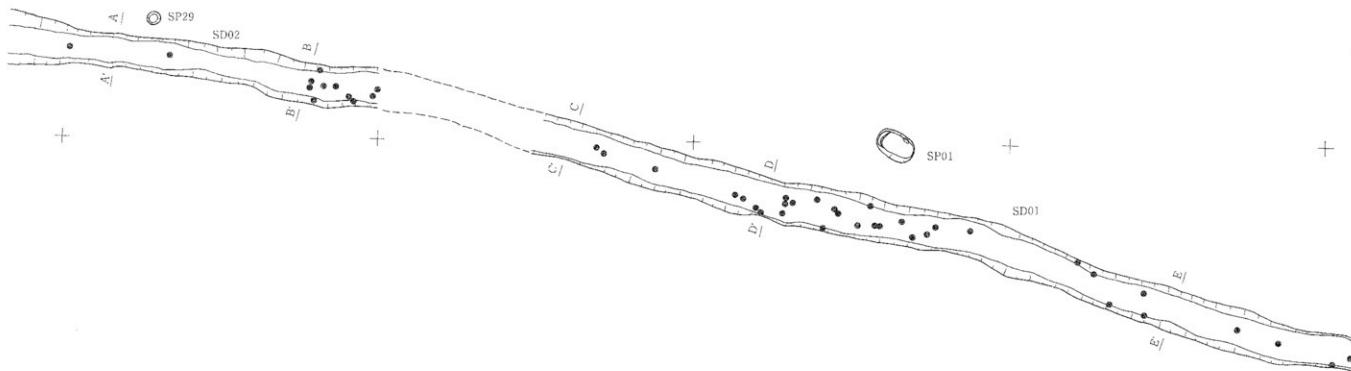
第11図 邊構実測図（5） SP20・22~29・31・32・39~45・47~51 (S=1/30)



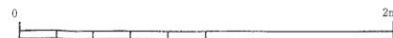
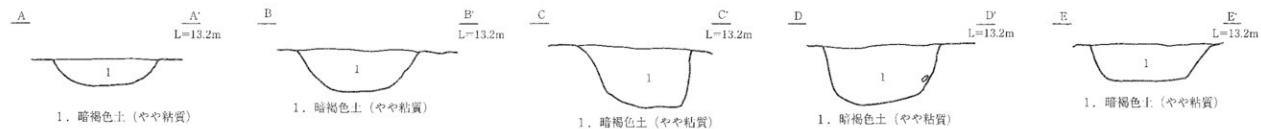
第12図 遺構実測図（6） SX01 ( $S=1/40$ )



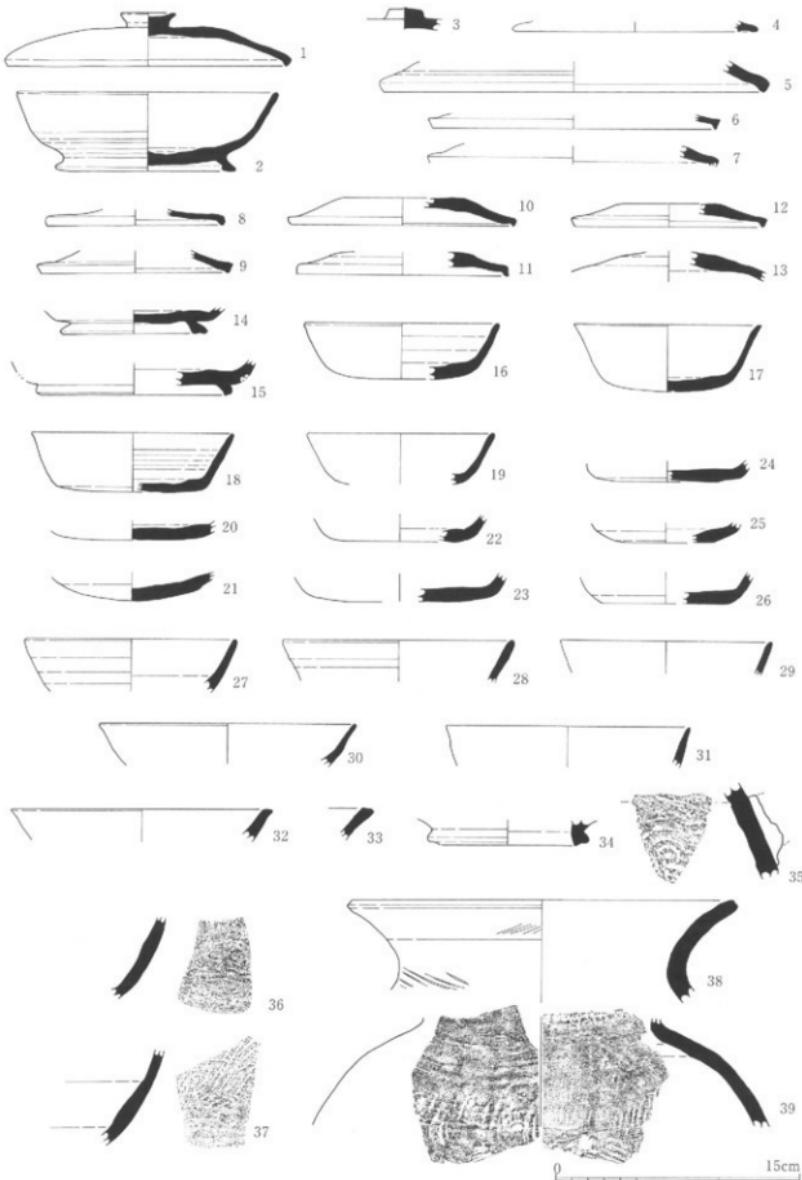
第13図 遺構実測図（7） 土器だまり ( $S=1/20$ )



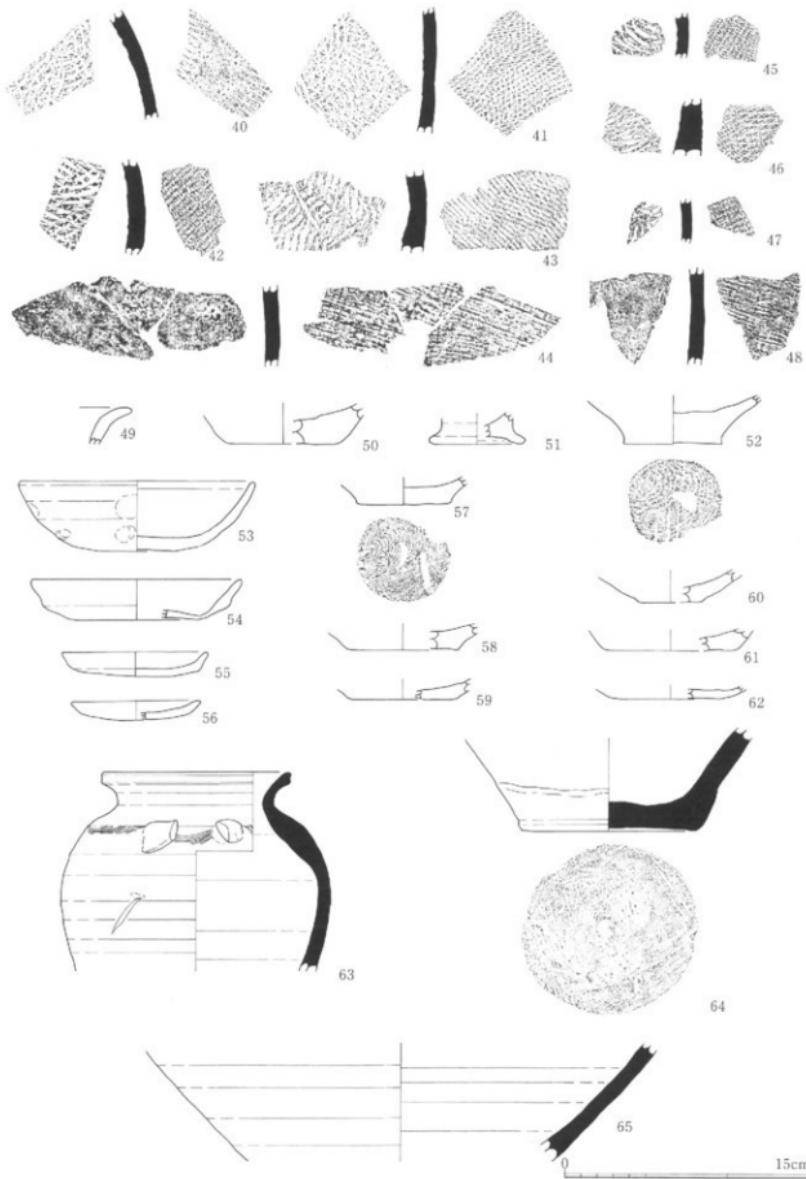
●は遺物出土地点



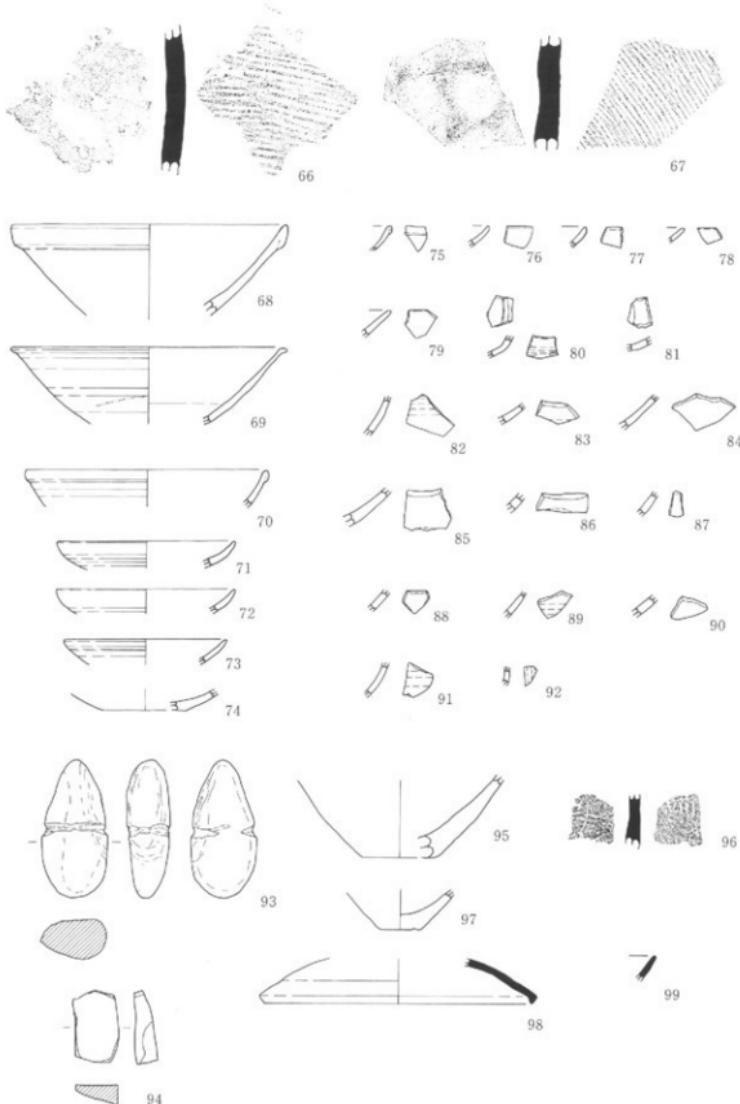
第14図 遺構実測図(8) SD01・02(平面図 S=1/60、断面図 S=1/20)



第15図 遺物実測図（1）

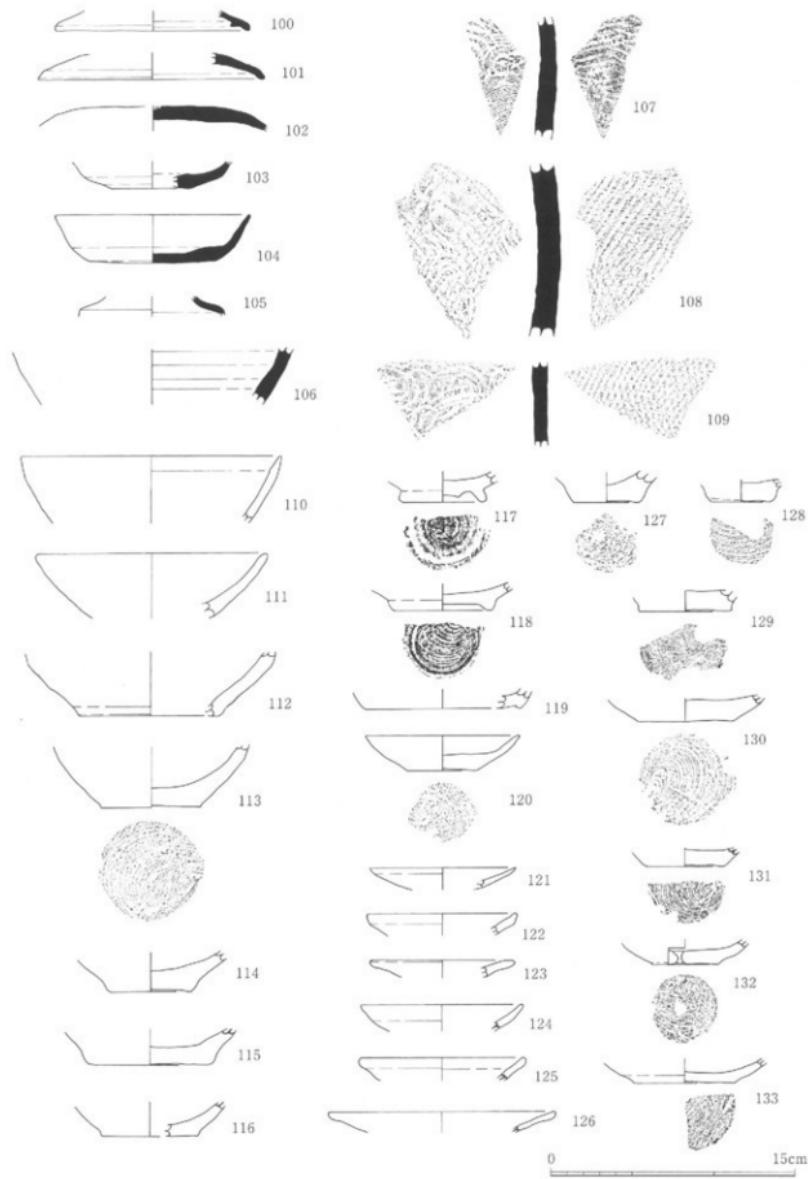


第16図 遺物実測図（2）

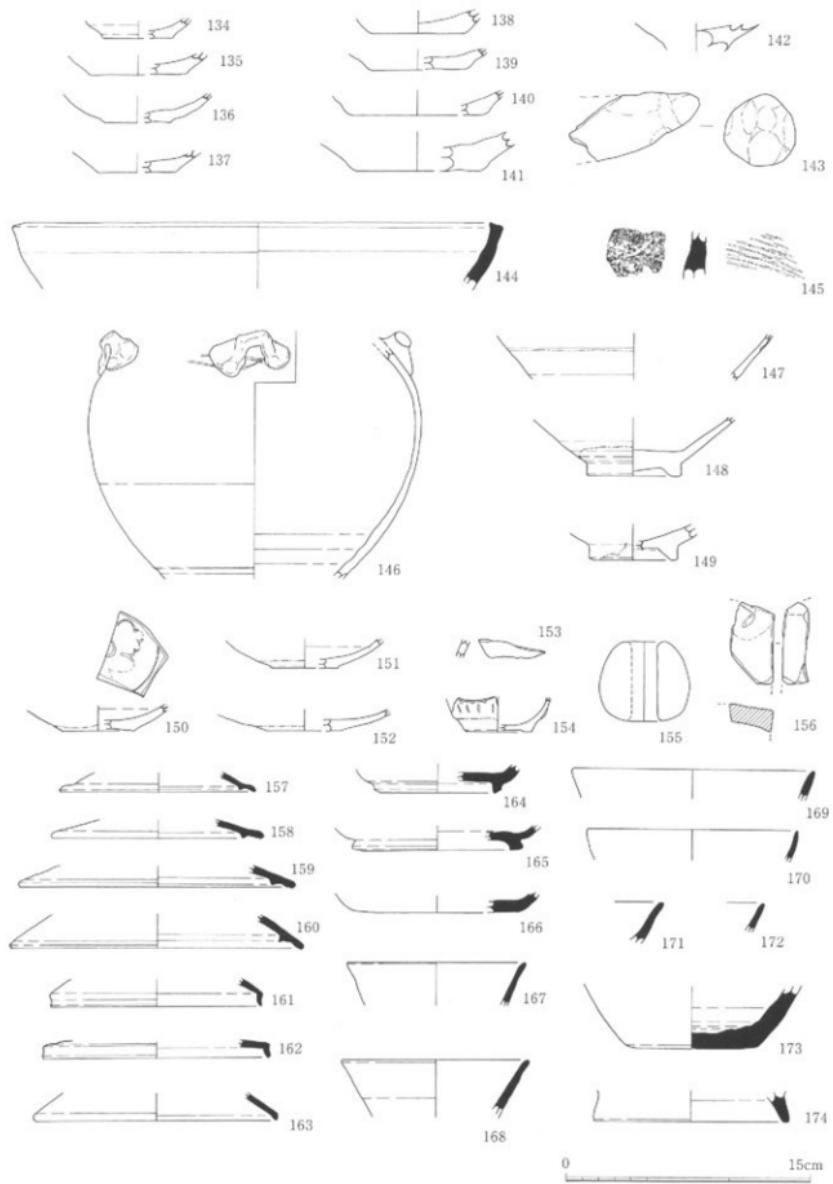


0 15cm

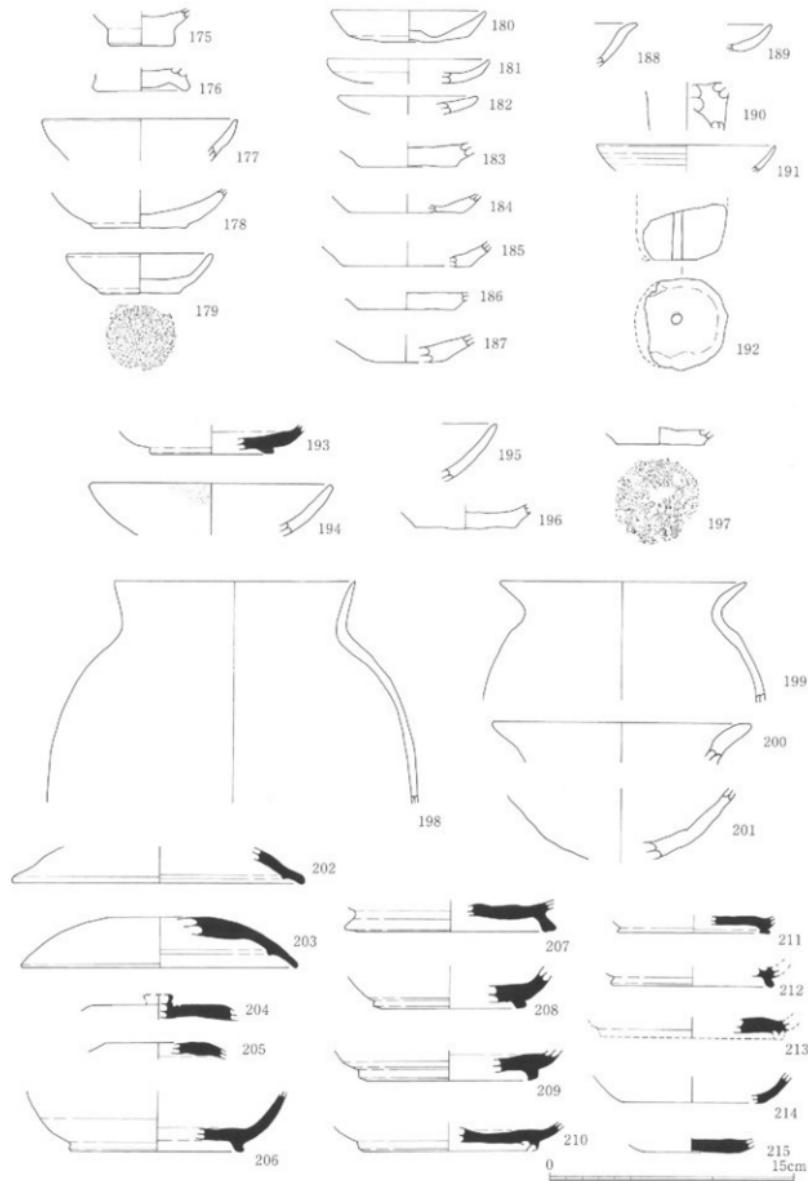
第17図 遺物実測図（3）



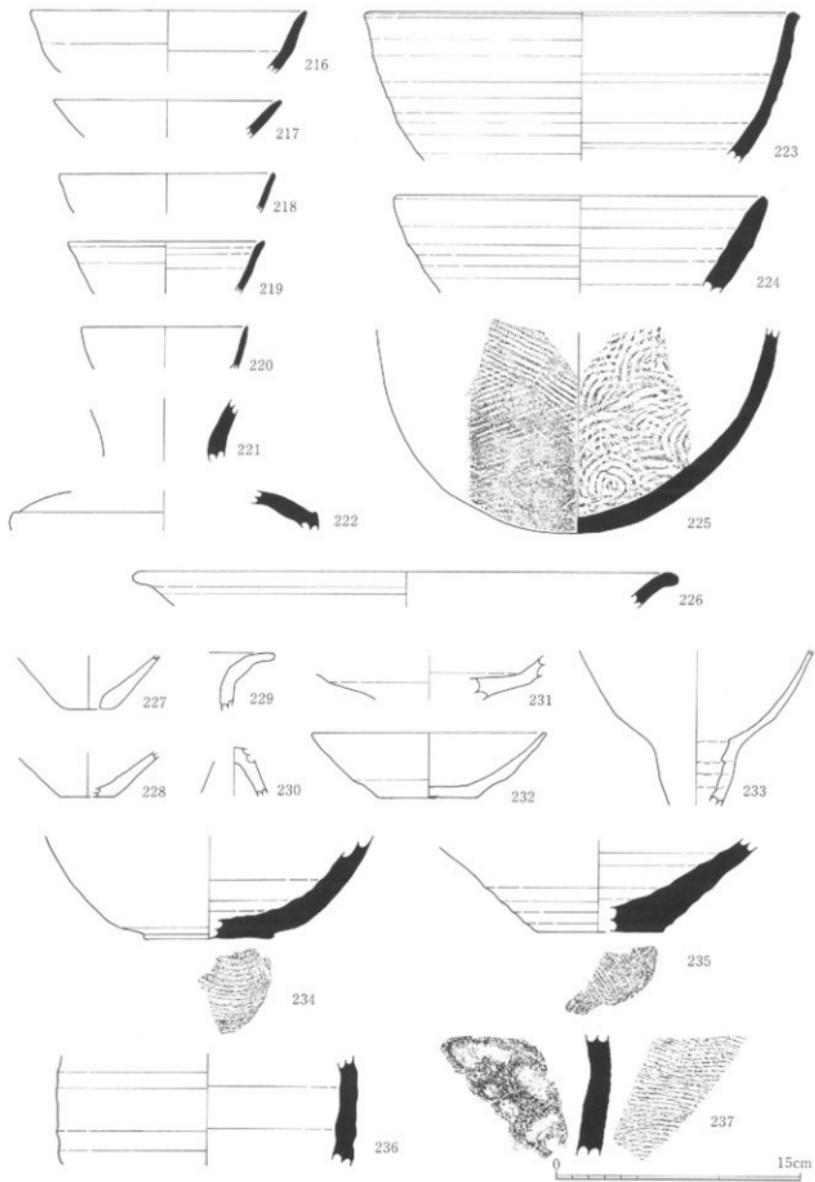
第18図 遺物実測図（4）



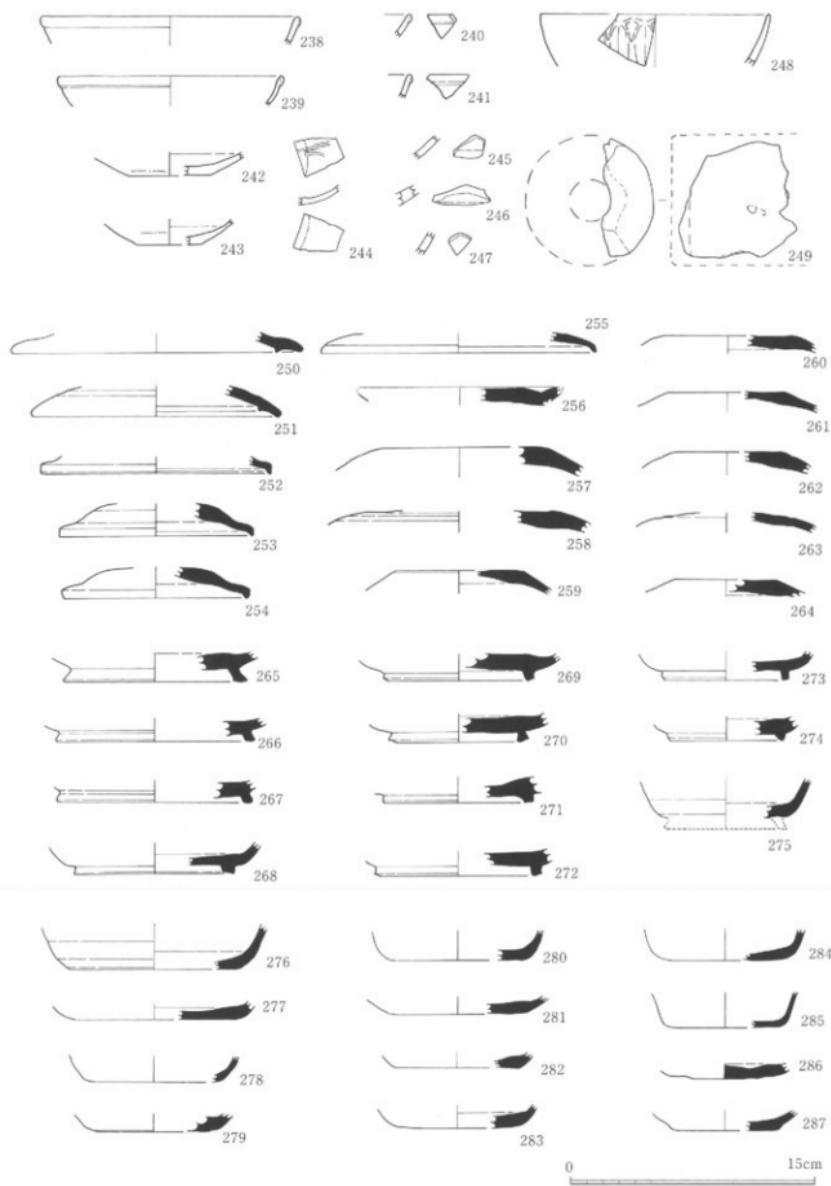
第19図 遺物実測図（5）



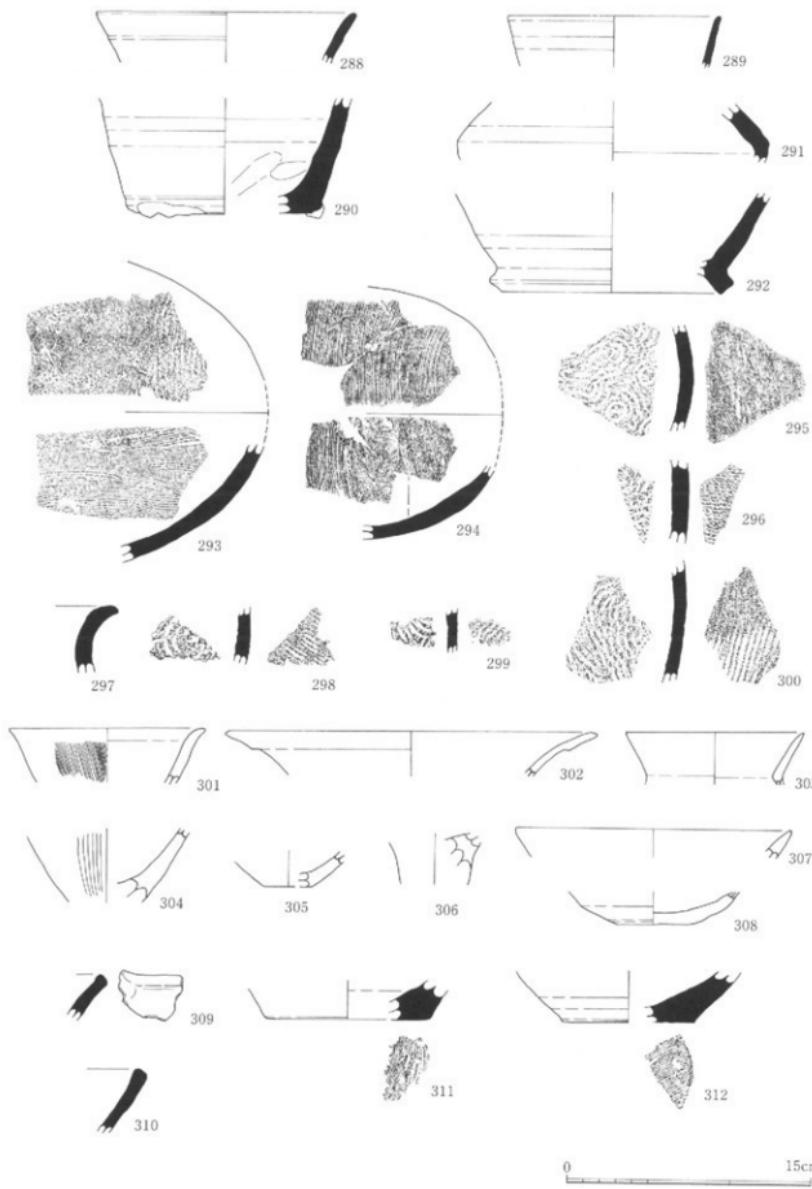
第20図 遺物実測図（6）



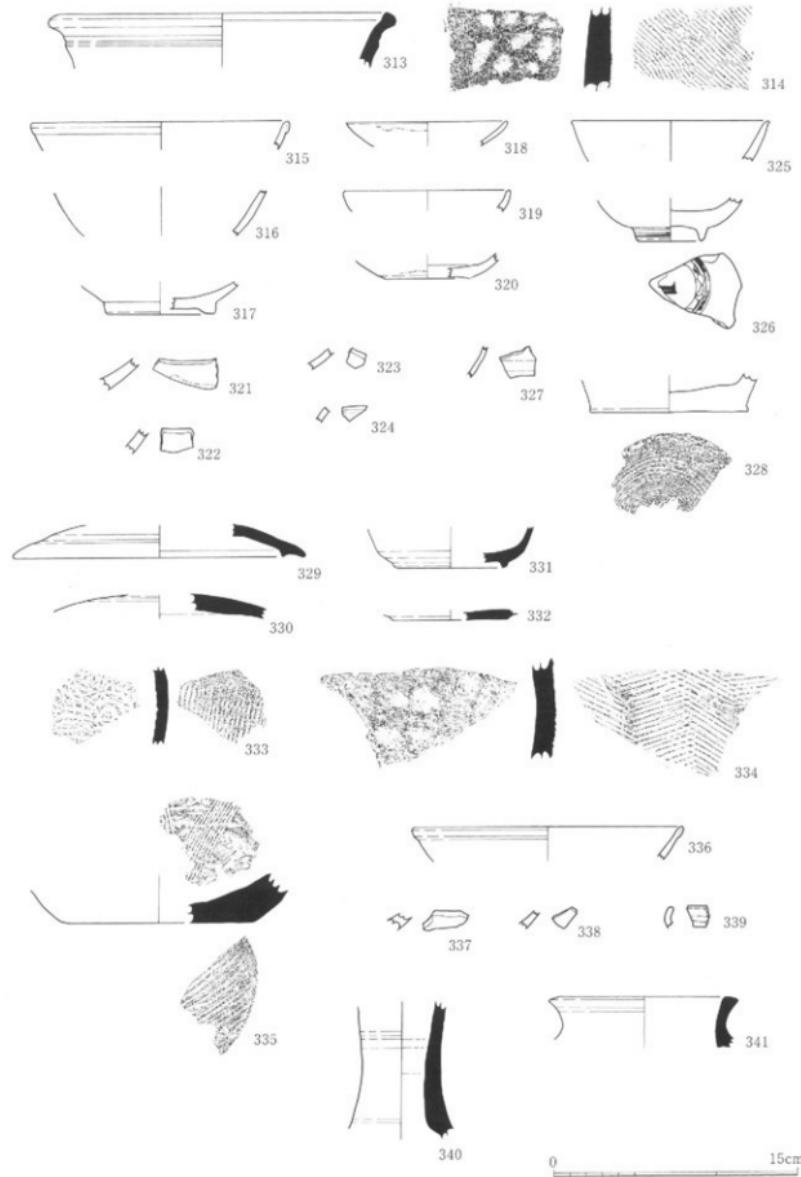
第21図 遺物実測図（7）



第22図 遺物実測図（8）



第23図 遺物実測図（9）



第24図 遺物実測図（10）

# 図 版



図版1　遺跡周辺空中写真（1947年撮影）

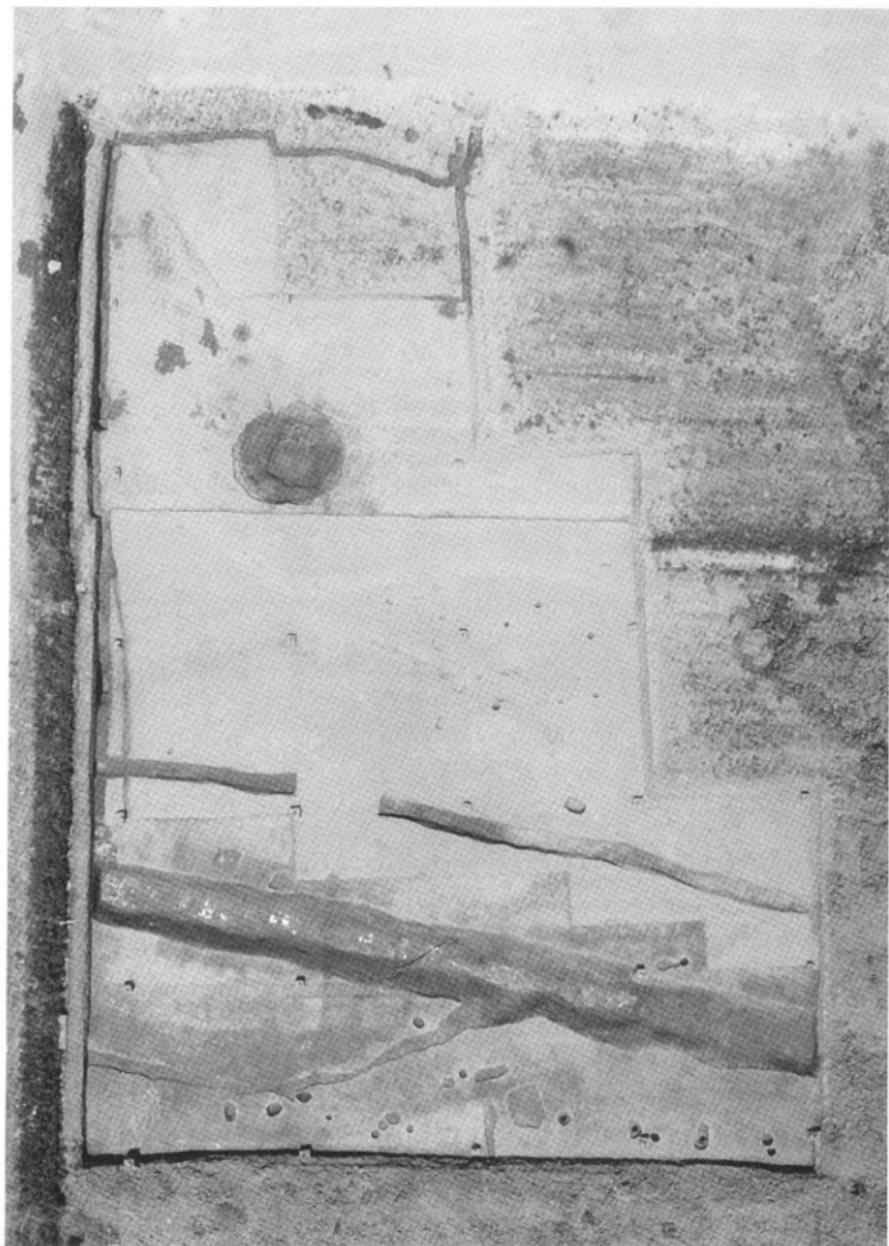


1



2

図版 2 1. 新保南遺跡遠景(北から) 2. 調査区近景(北から)



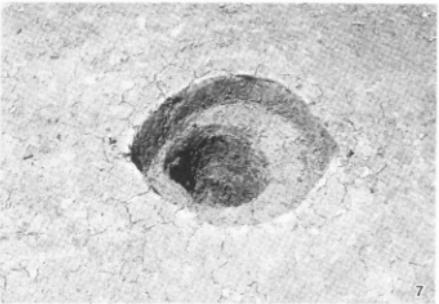
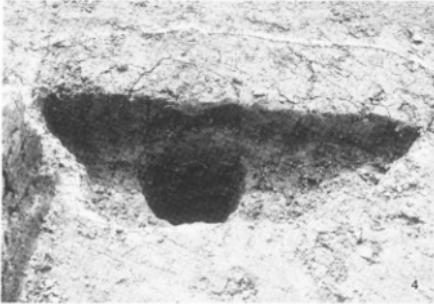
図版3 調査区全景



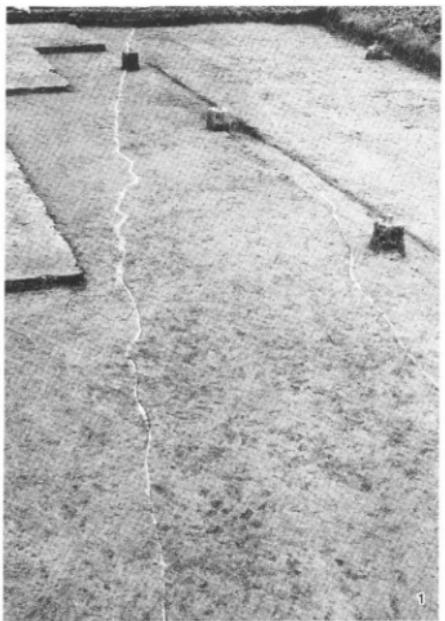
図版4 1. 調査前遺跡近景(北西から) 2. 調査区基本土層(東から)



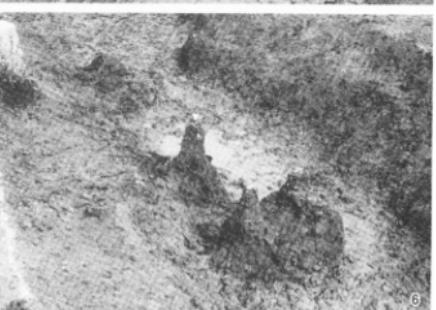
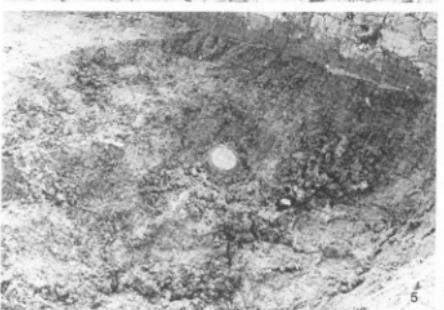
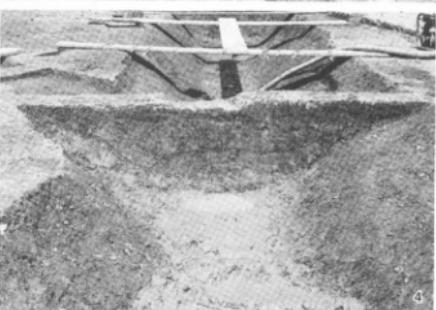
図版 5 1. 調査区南側完掘状況(東から) 2. 調査区南側完掘状況(北西から)



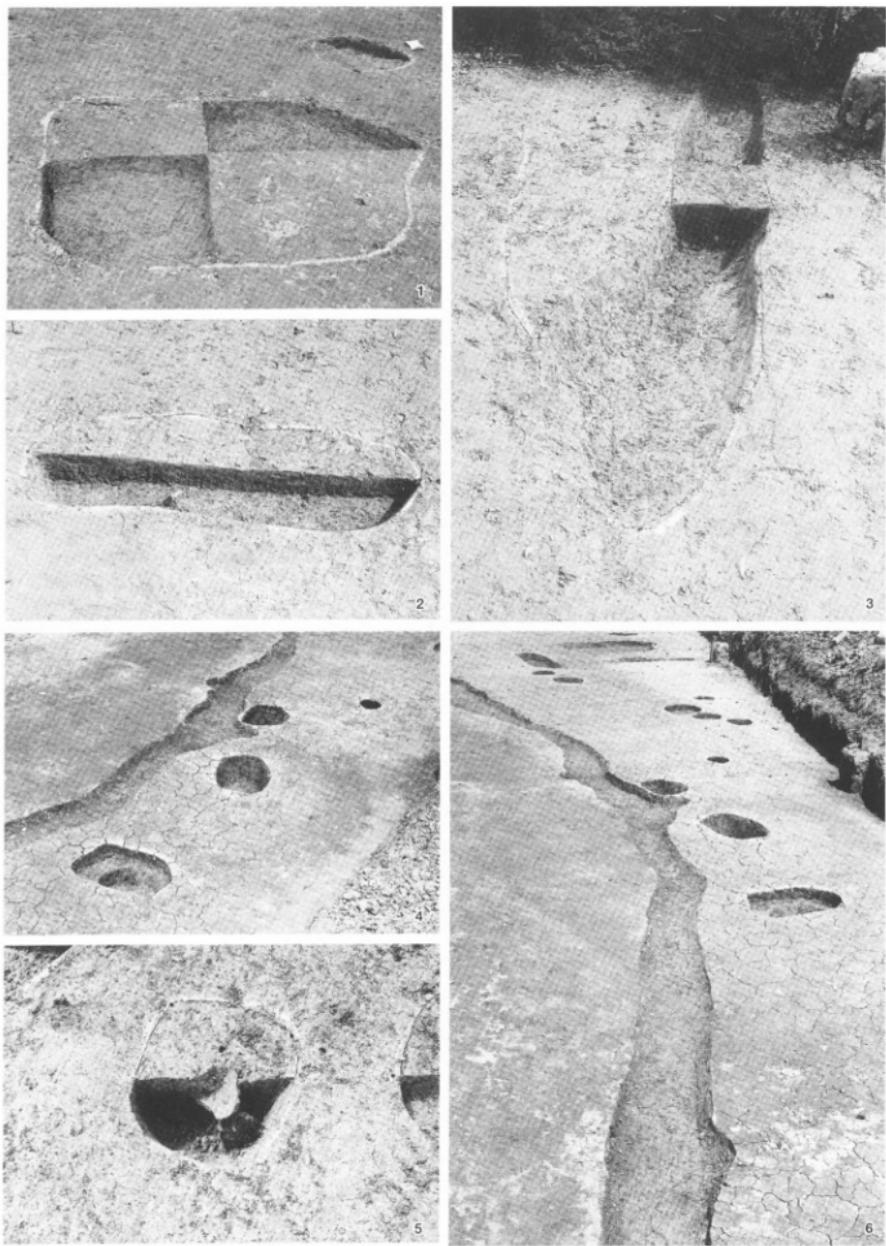
図版 6 1. 柱穴列とSD03(東から) 2. 柱穴列とSD03(北から) 3. 柱穴列(東から) 4. SP37  
土層断面(東から) 5. SP37完掘状況(東から) 6. SP38土層断面(東から) 7. SP38完  
掘状況



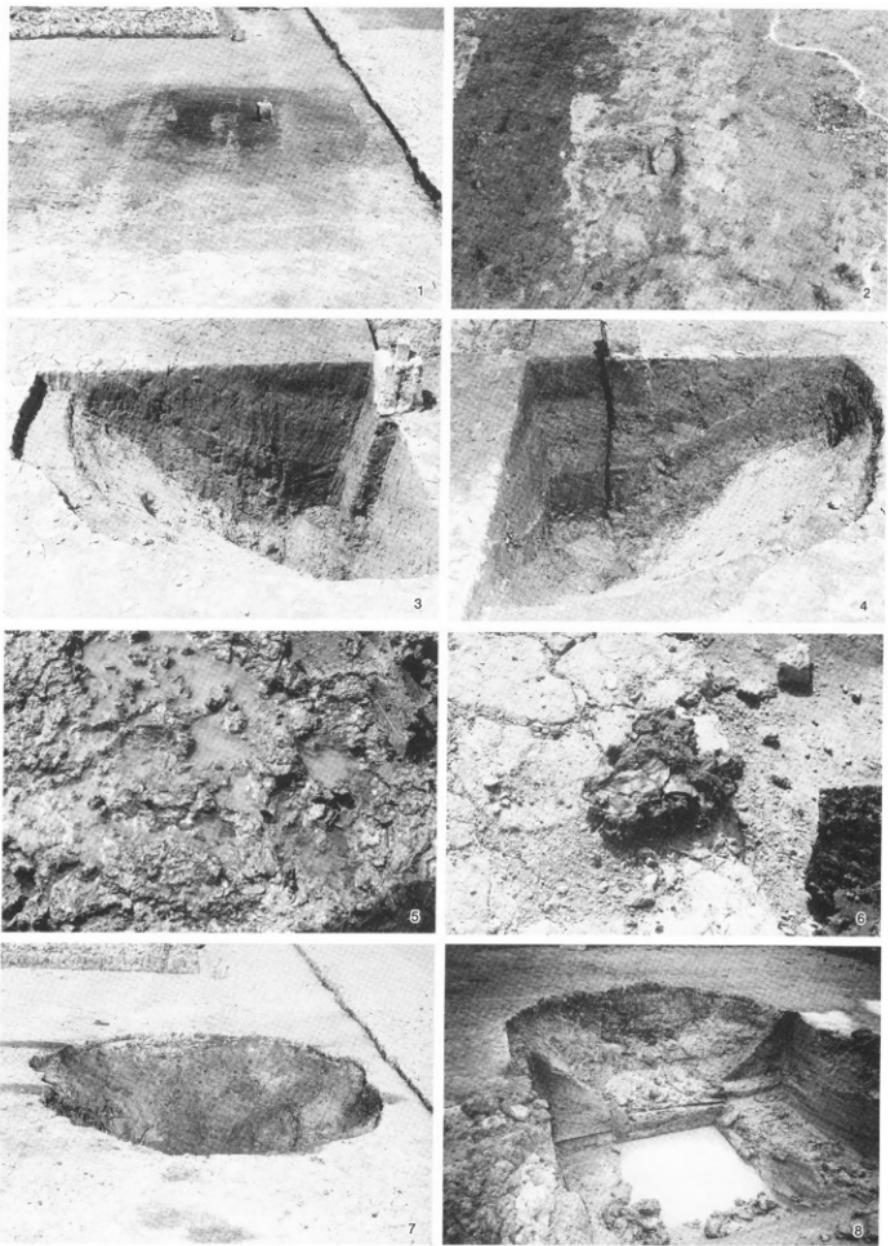
図版7 1. SD03検出状況(西から) 2. SD03完掘状況(西から)  
3. SD04検出状況(西から) 4. SD04完掘状況(西から)



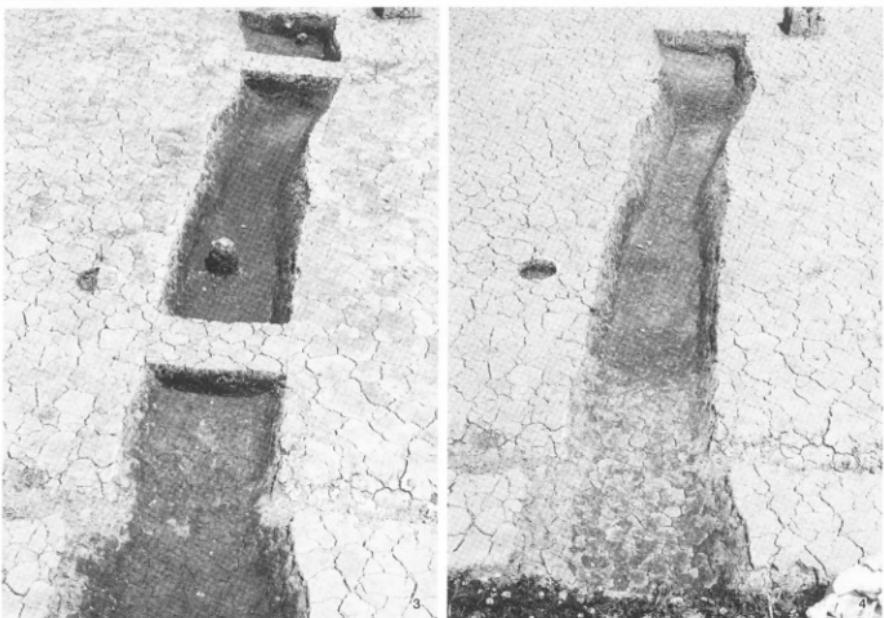
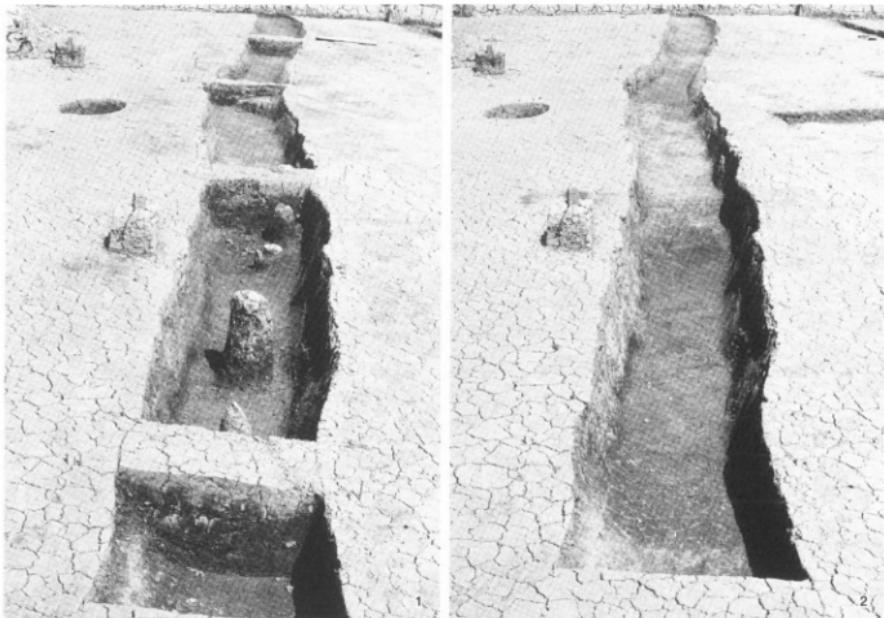
図版8 1. SD03とSD04(北東から) 2. SD03とSD04(西から) 3. SD03土層断面A-A'(西から)  
4. SD03土層断面B-B'(東から) 5・6. SD03遺物出土状況 7. SD04土層断面C-C'(東から)  
8. SD04・SP46土層断面D-D'(東から)



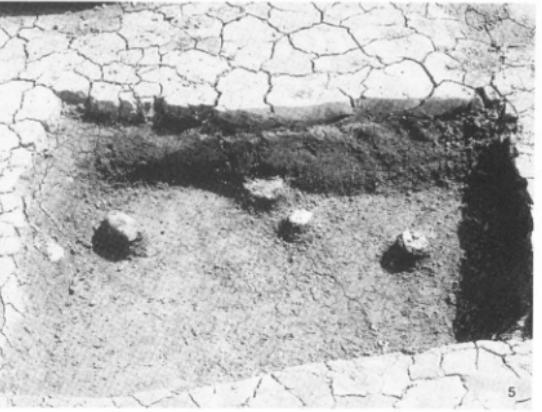
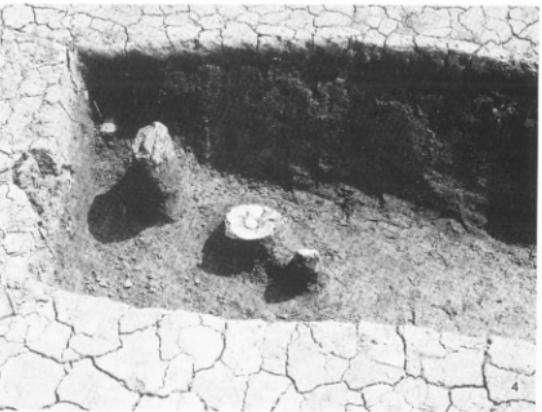
図版 9 1. SK01(西から) 2. SK02(北から) 3. SK05(北から) 4. 下層遺構ピット群(南西から)  
5. SP39遺物出土状況(北西から) 6. 下層遺構完掘状況(西から)



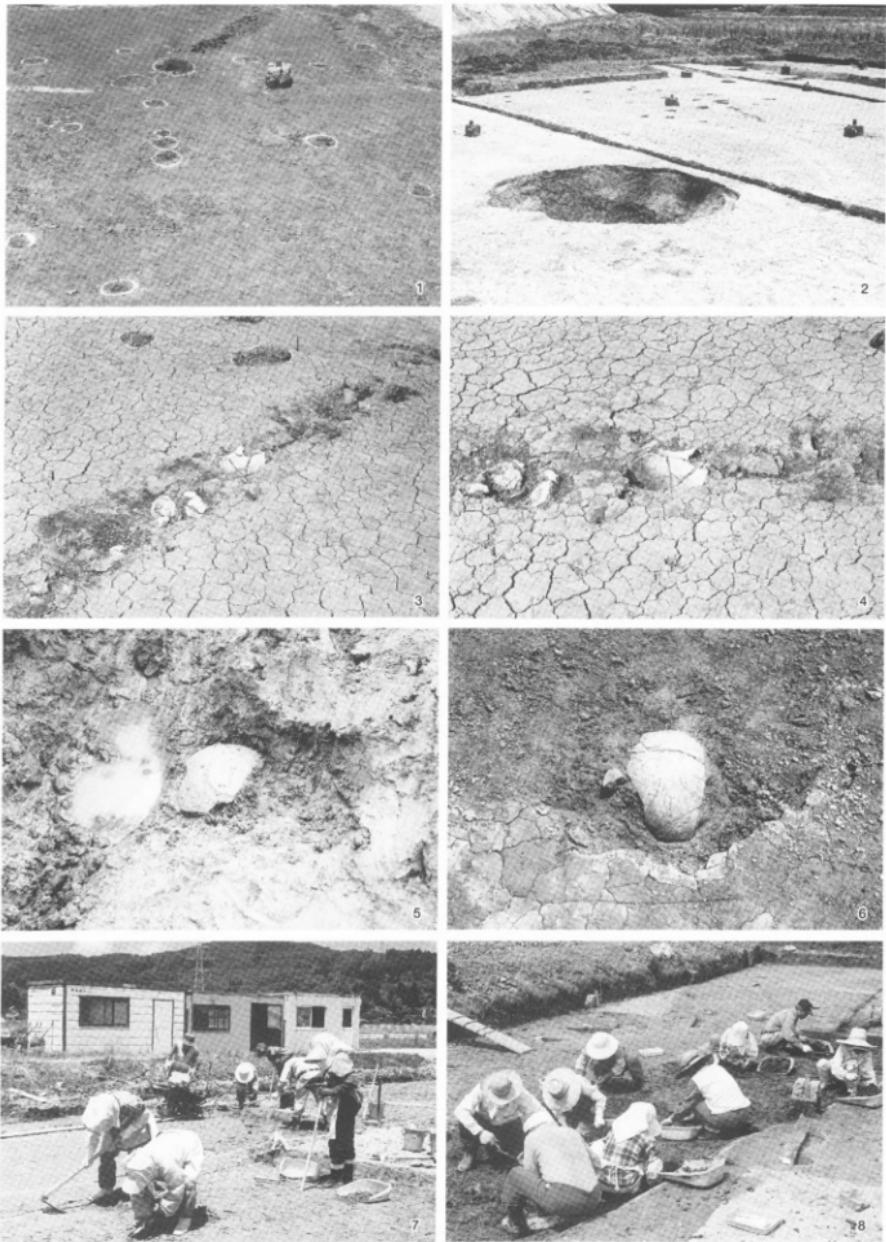
図版10 1. SX01検出状況(西から) 2. SX01遺物出土状況 3. SX01西側土層断面(南から)  
 4. SX01南側土層断面(西から) 5. SX01第4層自然遺物堆積状況 6. SX01自然遺物(葉)  
 7. SX01完掘状況(西から) 8. SX01断ち割り



図版11 1. SD01土層断面(西から) 2. SD01完掘状況(西から)  
4. SD02完掘状況(西から)



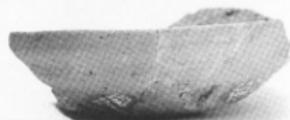
図版12 1. SD01検出状況(東から) 2. SD01・SD02完掘状況(西から) 3・4. SD01遺物出土状況  
5. SD02遺物出土状況



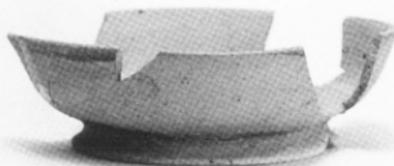
図版13 1. 上層遺構ピット群検出状況(東から) 2. 上層遺構完堀状況(北西から) 3. 土器だまり(南西から) 4. 土器だまり遺物出土状況(南から) 5・6. 包含層II遺物出土状況 7・8. 作業風景



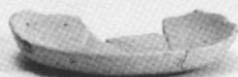
1



53



2



55

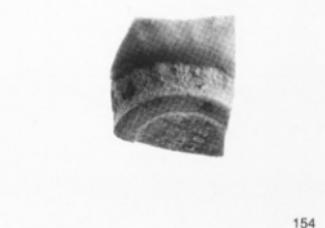
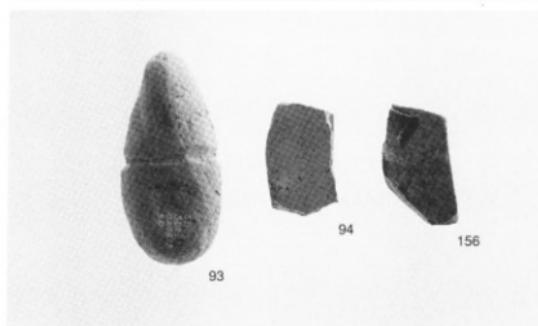


56



63

図版14 遺物写真（1） SD03出土遺物



図版15 遺物写真（2） SD03・SX01・SD01出土遺物



232



233



249

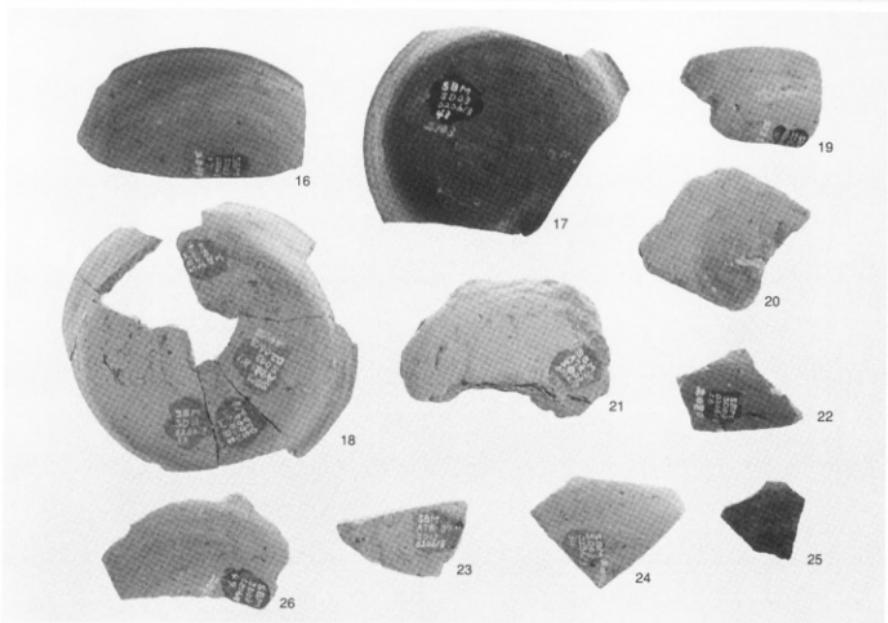
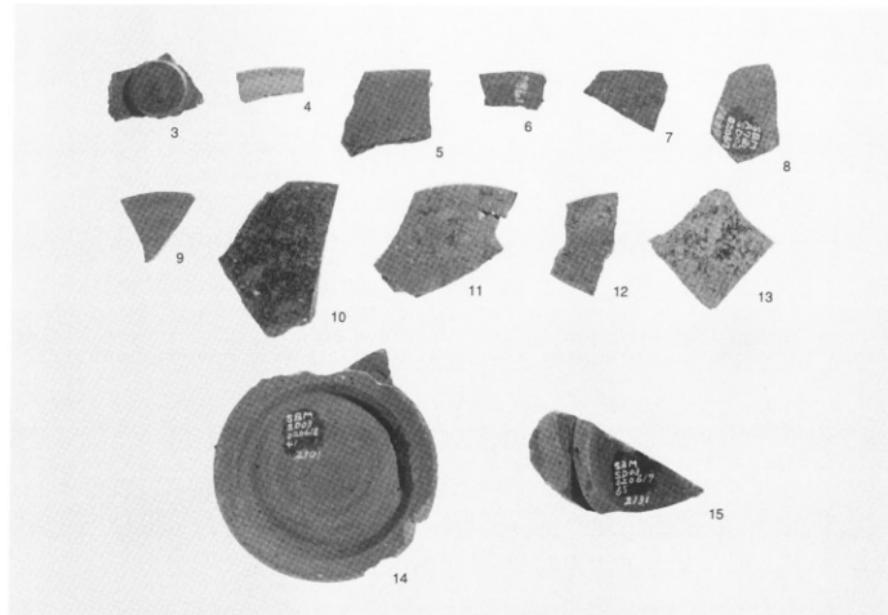


瓦凸面



瓦凹面

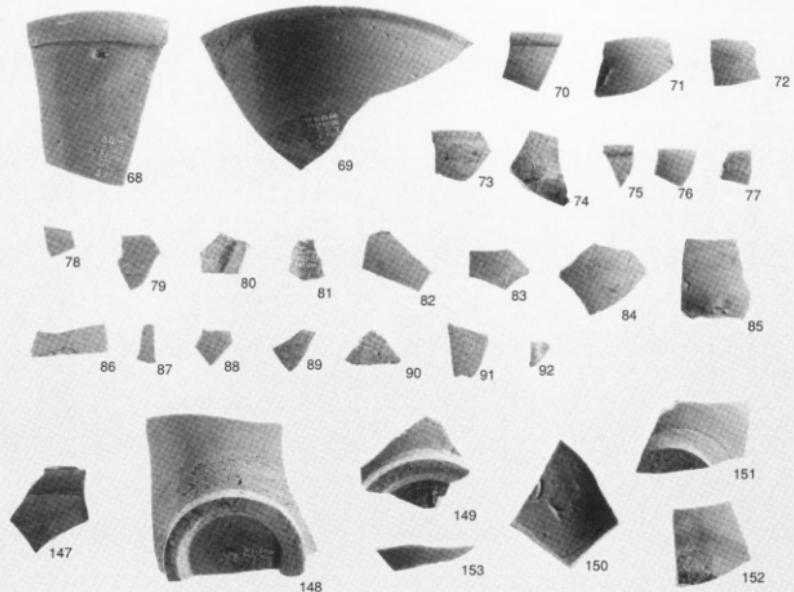
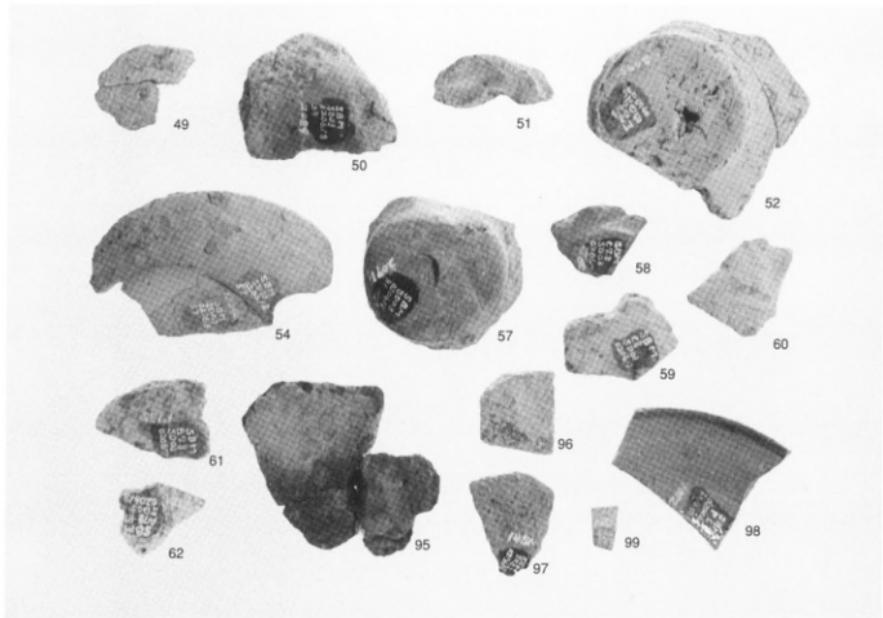
図版16 遺物写真（3） 包含層Ⅱ出土遺物・SX01出土瓦



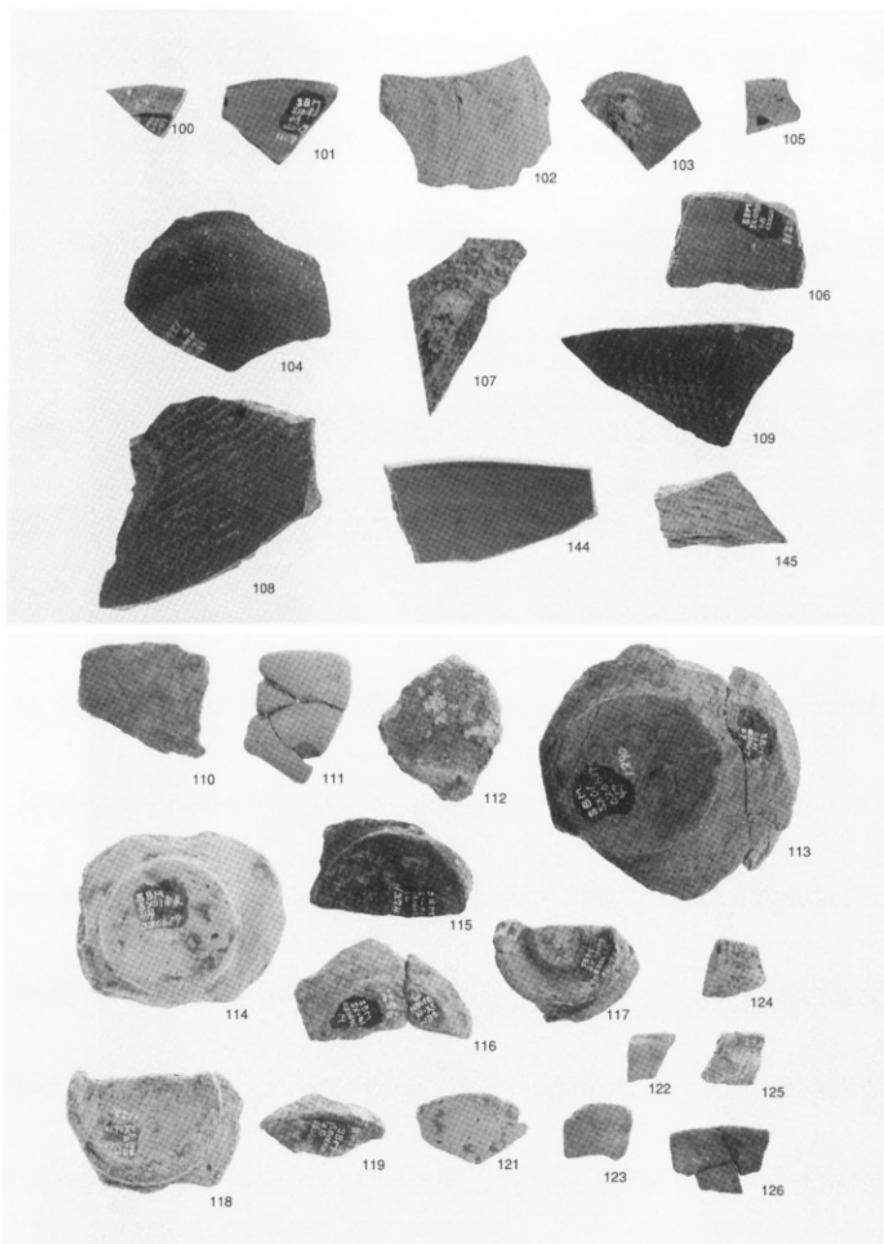
図版17 遺物写真 (4) 上：SD03出土遺物（須恵器杯蓋・杯B身）  
下：SD03出土遺物（須恵器杯A）



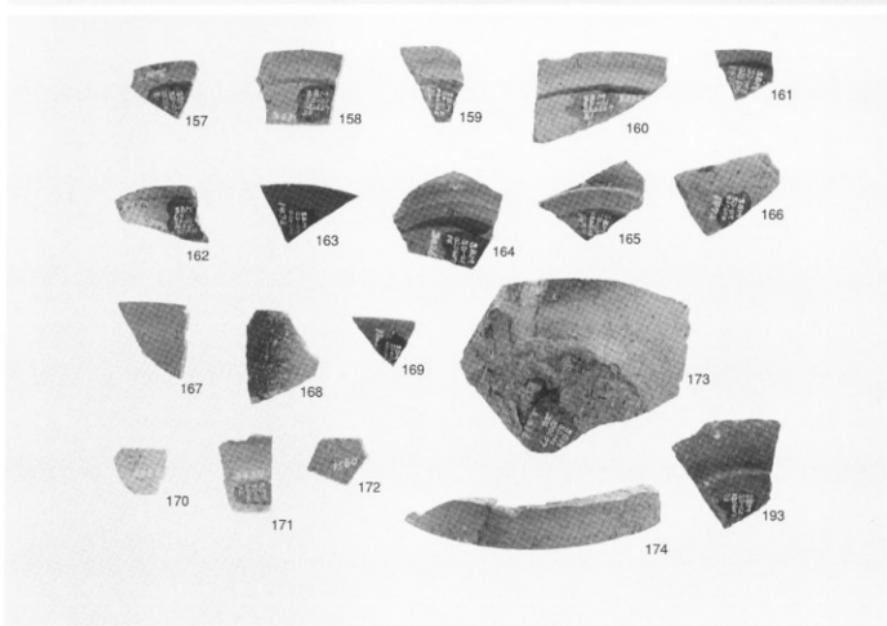
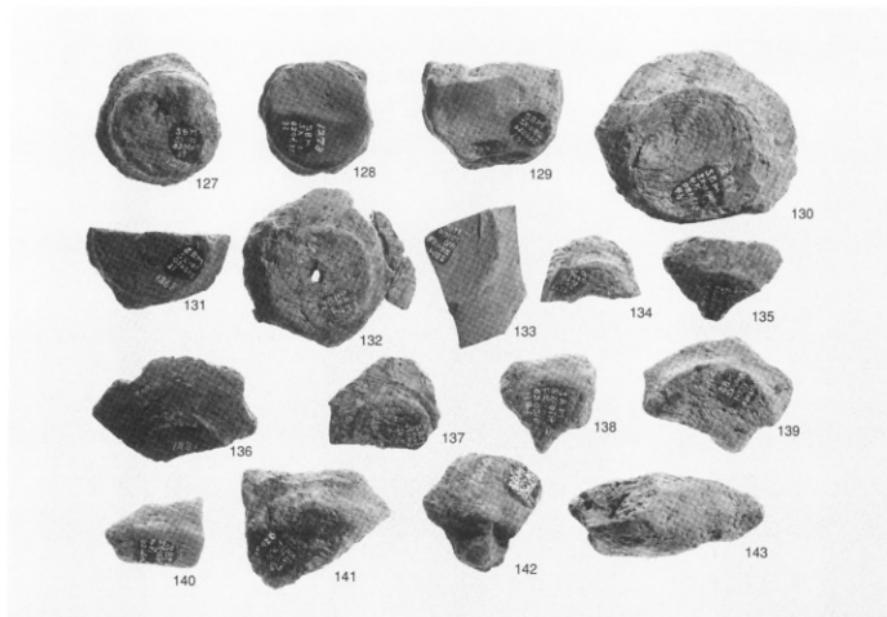
図版18 遺物写真（5） 上：SD03出土遺物（須恵器）  
下：SD03出土遺物（須恵器・珠洲焼）



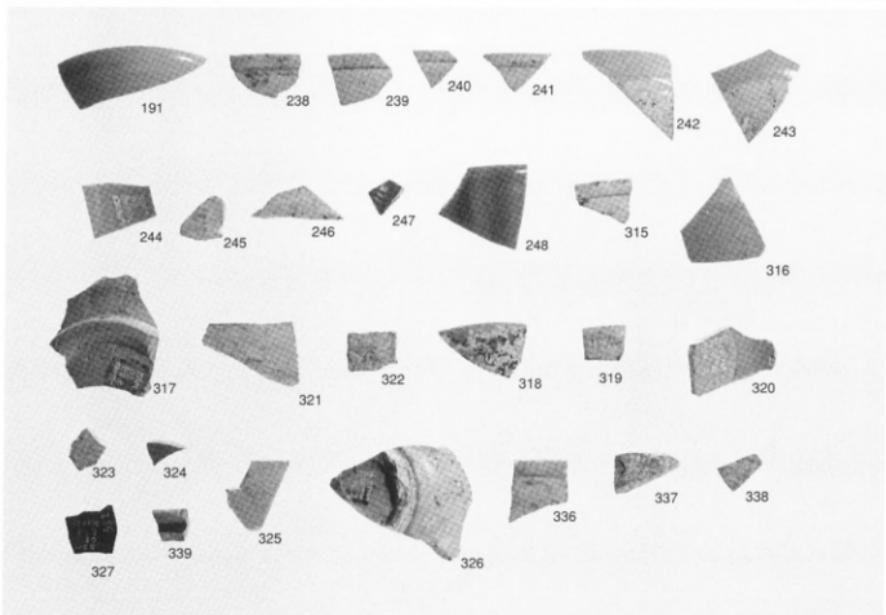
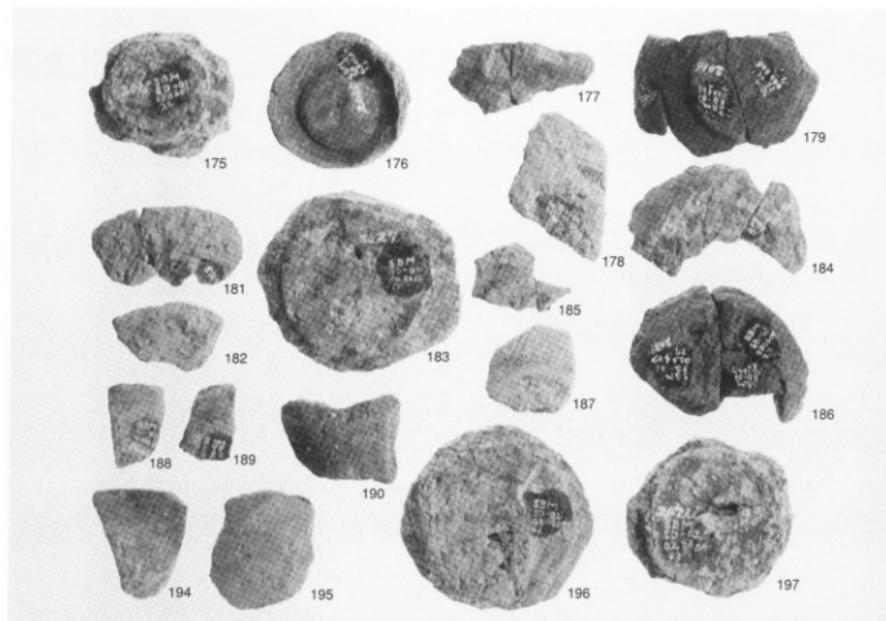
図版19 遺物写真 (6) 上: SD03出土遺物(土器類)、SD05・SK01・SK02・SP01・SP24出土遺物  
下: SD03・SX01出土遺物(白磁・青白磁・施釉陶器)



図版20 遺物写真（7） 上：SX01出土遺物（須惠器・珠洲焼）  
下：SX01出土遺物（土器類）



図版21 遺物写真 (8)  
上 : SX01出土遺物 (土器類)  
下 : SD01・SD02出土遺物 (須恵器)



図版22 遺物写真（9） 上：SD01・SD02出土遺物（土器類）

下：SD01・包含層II・包含層I・表土中出土遺物（白磁・青磁・近世陶磁器）

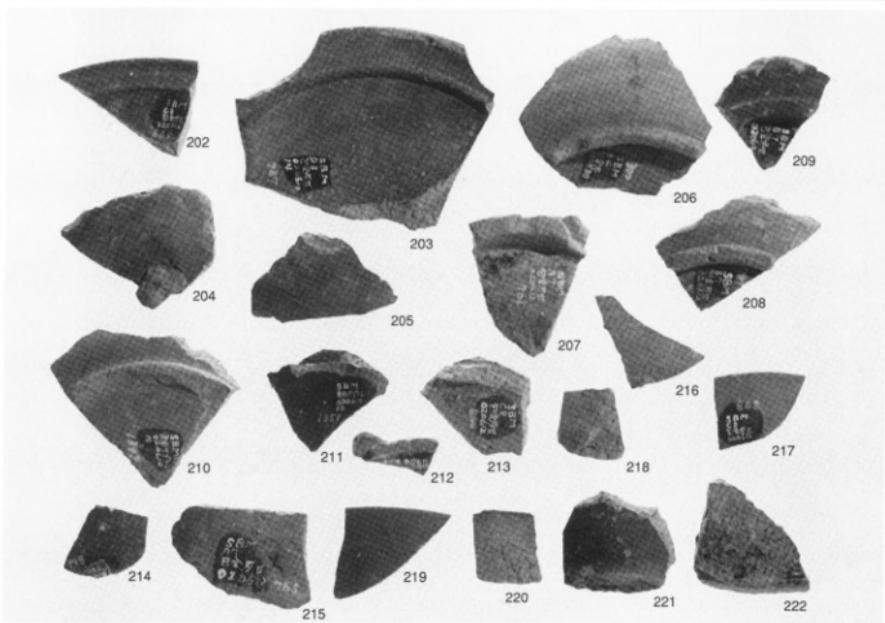
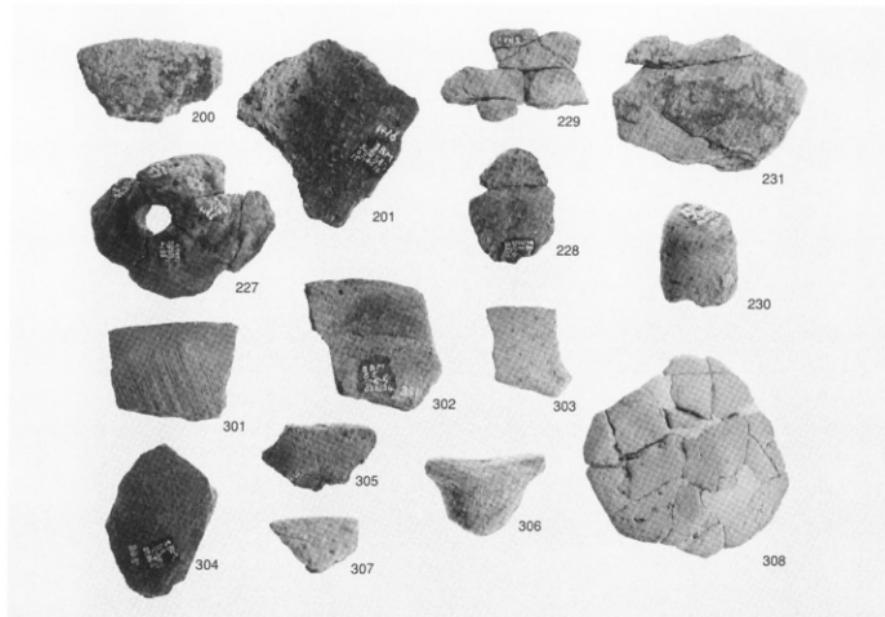


198

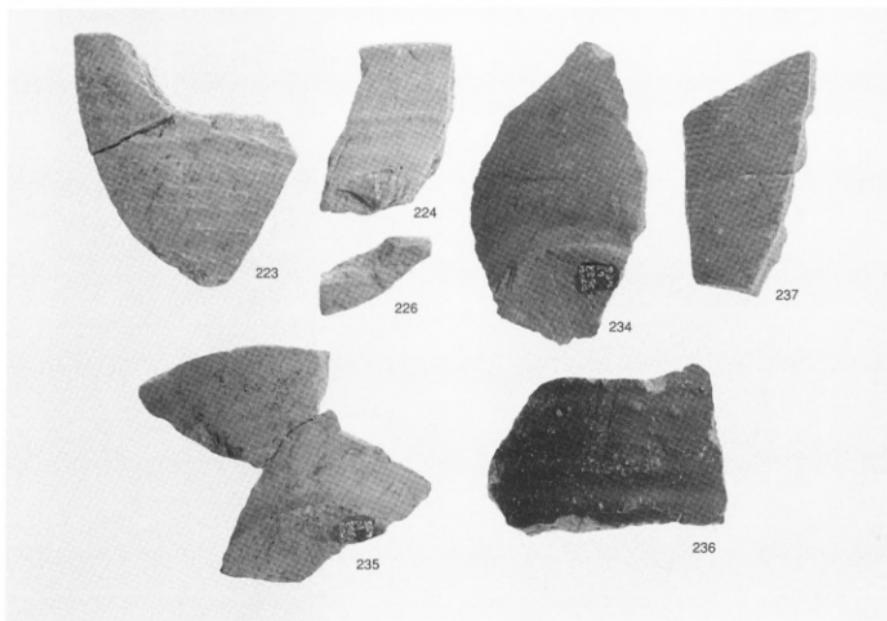


199

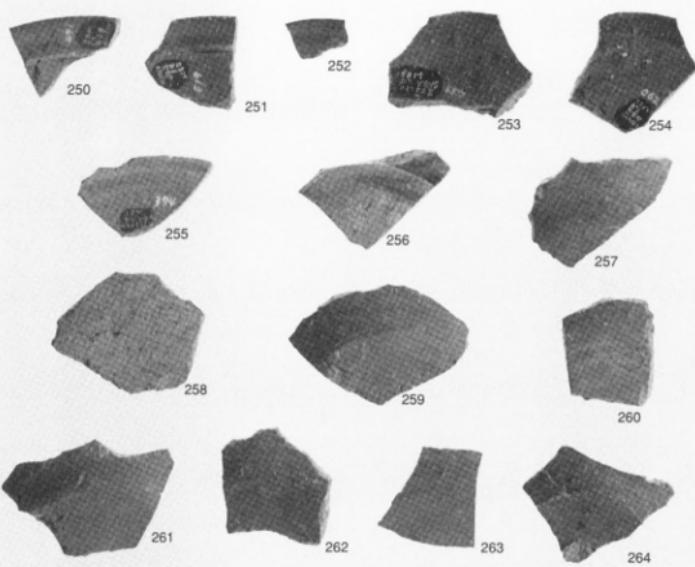
図版23 遺物写真 (10) 土器だまり出土遺物



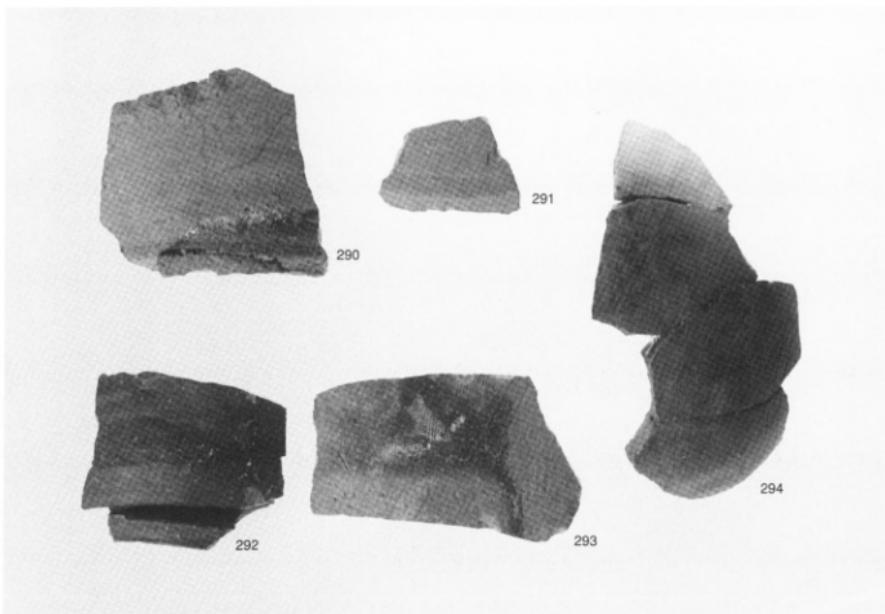
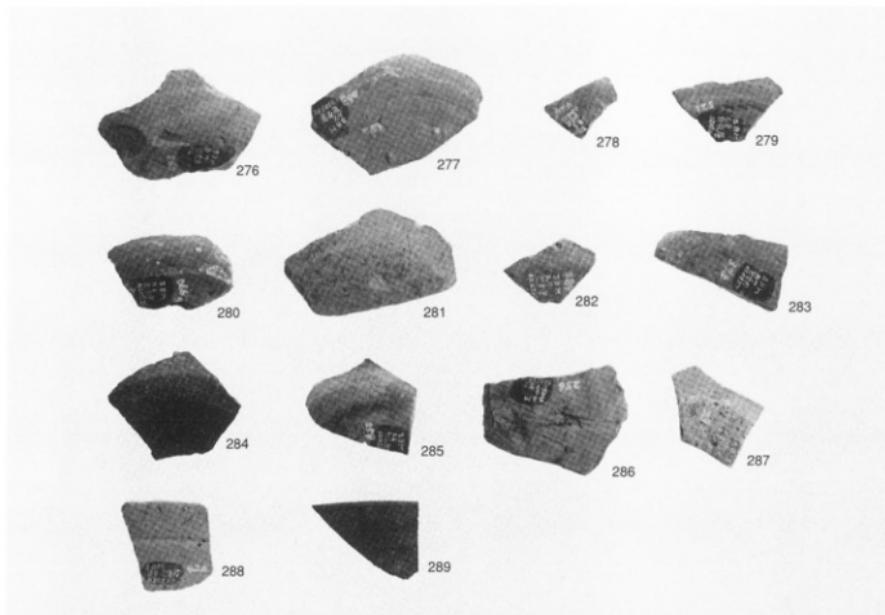
図版24 遺物写真 (11) 上：土器だより・包含層II・包含層I出土遺物（土器類）  
下：包含層II出土遺物（須恵器）



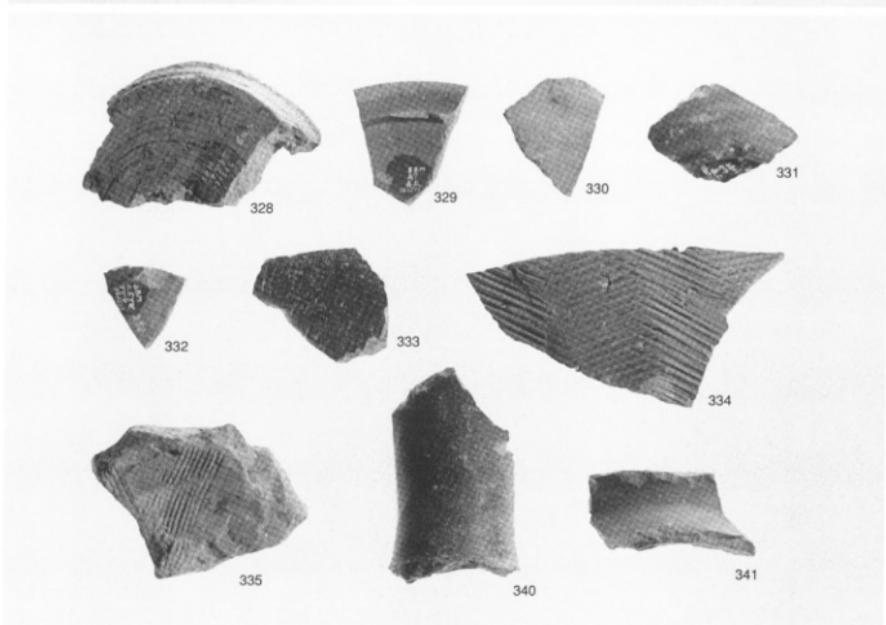
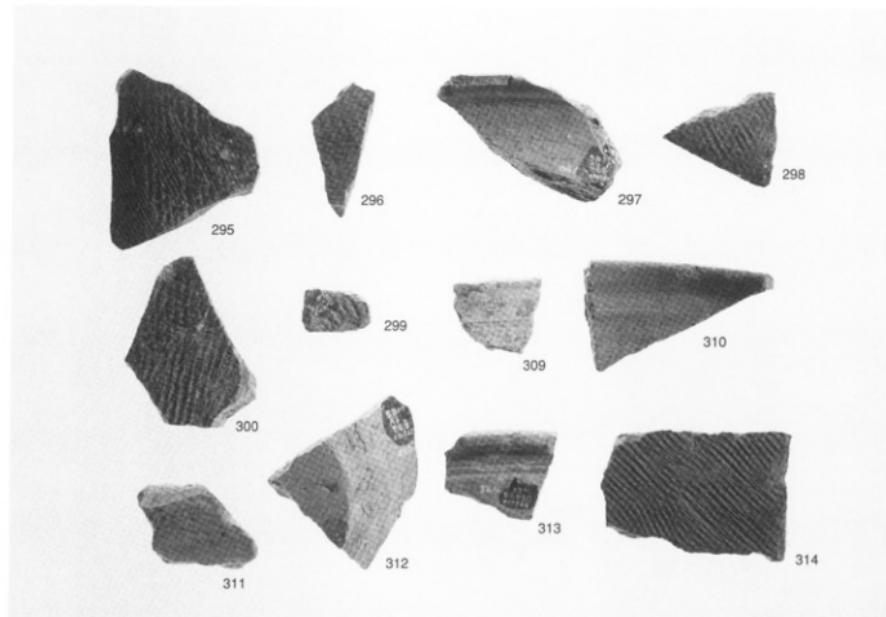
図版25 遺物写真 (12) 上：包含層II出土遺物（須恵器壺）  
下：包含層II出土遺物（須恵器・珠洲焼）



図版26 遺物写真 (13)  
上：包含層I出土遺物（須恵器杯蓋）  
下：包含層I出土遺物（須恵器杯B身）



図版27 遺物写真 (14) 上：包含層Ⅰ出土遺物（須恵器・杯類）  
下：包含層Ⅰ出土遺物（須恵器）



図版28 遺物写真 (15)

上：包含層I出土遺物（須恵器・珠洲焼）

下：包含層I・表土中出土遺物（近世陶器・須恵器・珠洲焼）

表採遺物（須恵器）

## 報告書抄録

ふりがな	しんほみなみいせき							
書名	新保南遺跡							
副書名	中山間地域総合整備事業に伴う発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ号	水見市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第37冊							
編著者名	廣瀬直樹							
編集機関	水見市教育委員会							
所在地	〒935-0016 富山県水見市本町4番9号 TEL0766(74)8215							
発行年月日	2002年2月28日							
所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	°°'	°°'			
新保南遺跡	富山県水見市 新保	16205	301	36° 51' 10"	136° 59' 05"	20020507 20020621	約463m <sup>2</sup> 圃場整備	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
新保南遺跡	集落跡	古代 中世	流路・土坑・溝 ・ピットなど	須恵器 土師器 珠洲焼 貿易陶磁	中世の流路、溝、 柱穴列を検出した。			

平成15年2月24日 印刷  
平成15年2月28日 発行

## 新保南遺跡

水見市埋蔵文化財調査報告書37冊

編集・発行 水見市教育委員会  
 〒935-0016  
 富山県水見市本町4番9号  
 TEL0766(74)8215  
 印刷 株式会社チューイツ